

第4章 下市前築地遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地と環境(第36図)

下市前築地遺跡は、大山北麓の日本海に向けて緩やかに傾斜する丘陵上に位置している。この丘陵の西側には宮川が流れており、本遺跡は丘陵頂部から宮川へ下る斜面地の中腹に広がる平坦地にある。今回の調査地はこの平坦地を東西に横切る範囲である。調査地は中央付近の標高が高く、東西両方へ傾斜している。西側は宮川へ向けて徐々に下る緩斜面になっており、調査地西端から急角度で宮川へ下っている。東側は調査地東端から東へ浅い谷状に下がった後、丘陵頂部へ上る斜面となっている。調査前の現況は山林であった。

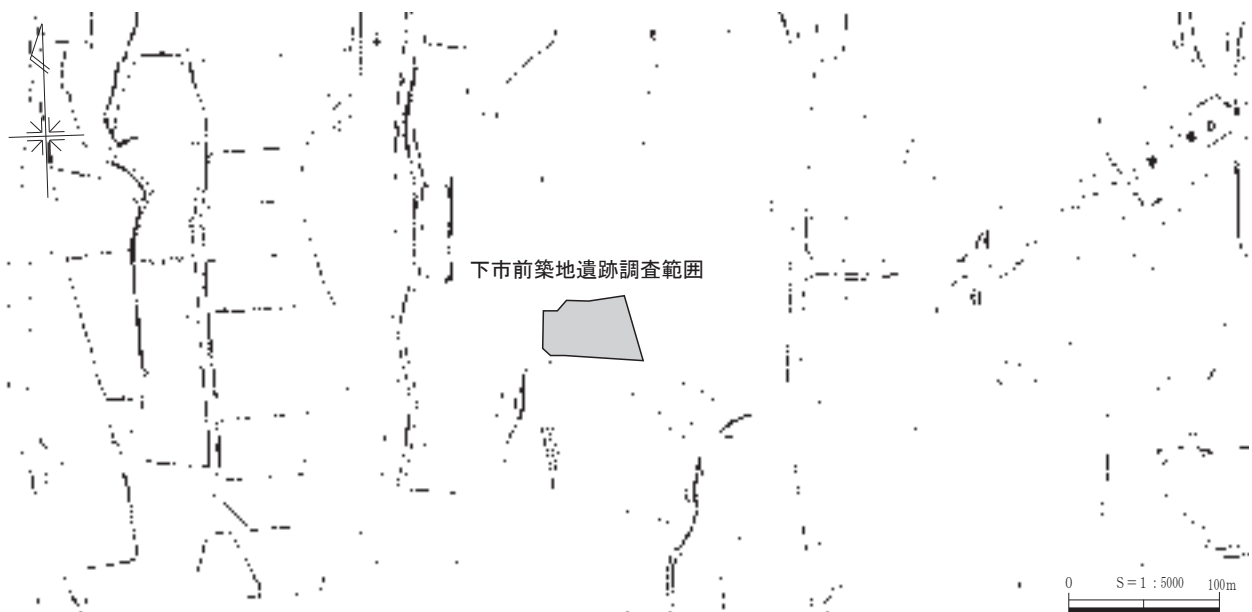
なお、調査着手時には、本発掘調査に先立って大山町教育委員会によって行われた試掘調査トレンチ5本を確認した。

2 調査地内の土層堆積(第37～40図、PL.19)

土層堆積の確認は、大山町教育委員会の試掘トレンチを利用しつつ、調査地中央に十文字の土層観察用ベルトを設定して行った。調査地内はほぼ全域にわたって土の堆積が共通しており、遺物包含層2層と遺構面3面を確認した。遺物が出土したI・II層はいずれも複数の時期の遺物を含んでいるが、遺物の時期と層位的な前後関係が矛盾しており、その要因は調査地周辺で一度堆積した土が、別々の時期に流入し再堆積したためと考えられる。

I層：表土直下の黒色土。調査地の全面に広がる。しまりがなく含有物が多く含まれていることから、二次堆積層であると考えられる。縄文時代から中世までの遺物を包蔵しており、堆積の由来は不明瞭である。色調及びしまりから、4層に分層した。出土遺物の下限は「嘉祐元寶」(初鑄年1056年)である。

Ia：黒色土(2.5Y2/1)。2～3mm大の炭化物粒及び礫を含む。しまり、粘性とも弱い。調査地の中央付近に堆積する。黒曜石の剥片、縄文土器片が出土した。



第36図 調査地周辺の地形

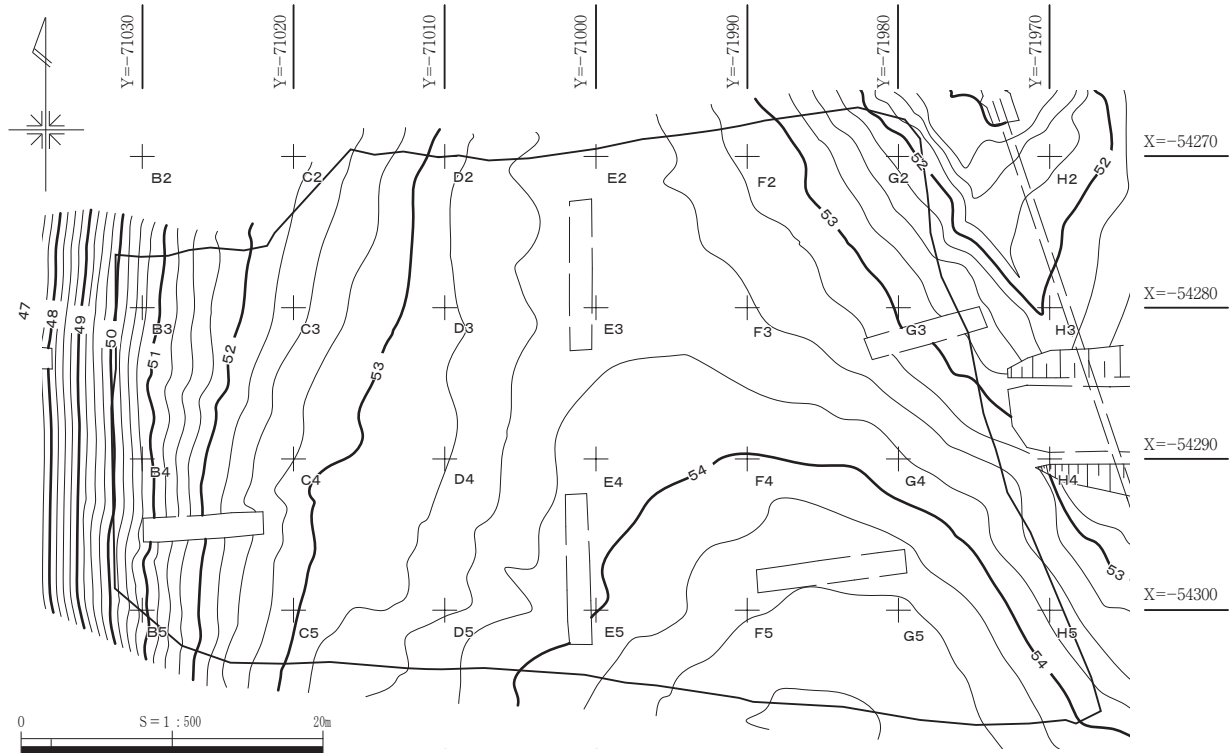
第4章 下市前築地遺跡の調査

Ib: 黒色土(2.5Y2/1)。2~3mm大の炭化物粒及び礫を含む。粘性なし。しまりなし。調査地の東半、東方向に下る緩やかな斜面に堆積する。平安時代前期の土師器と須恵器が出土した。

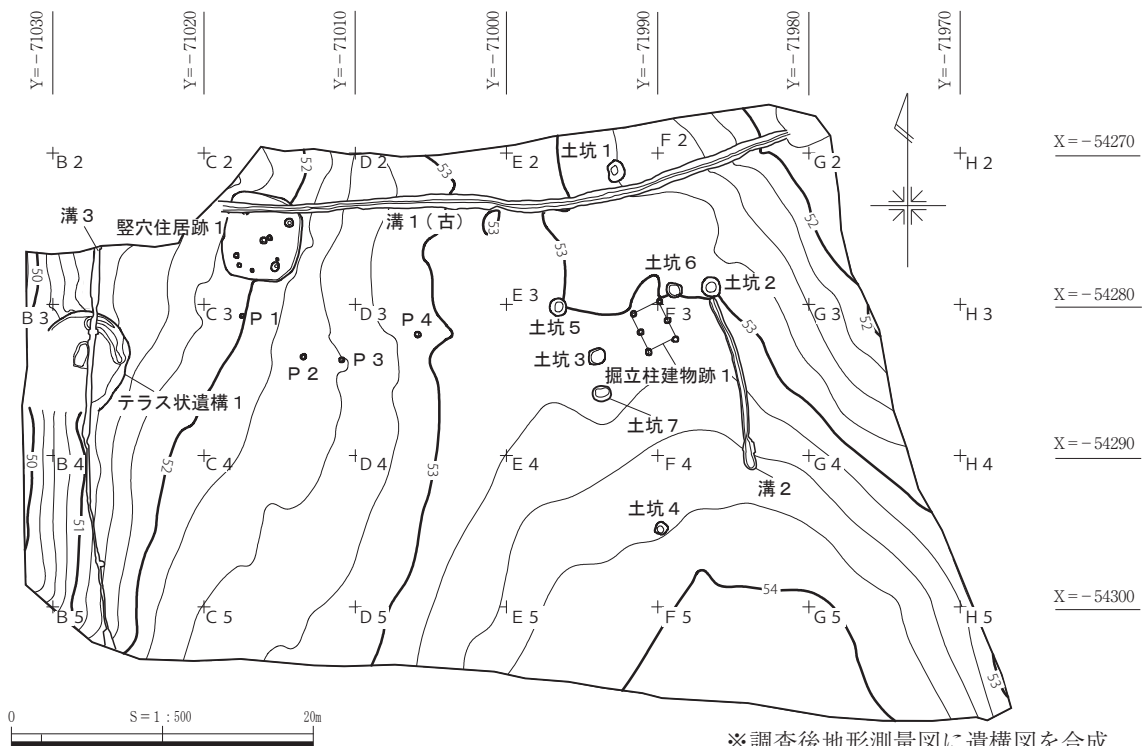
Ic: 黒色土(5YR1.7/1)。しまりなし。粘性なし。2~3mm大の礫を含む。縄文土器が出土した。

Id: 黒色土(5YR1.7/1)。cより明るく、しまり、粘性ともに弱い。部分的に確認した。

II層: 褐色系の層。I層とIII層の間に位置する。しまりがあり、時間的にある程度経過していると考え



第37図 調査前地形測量図

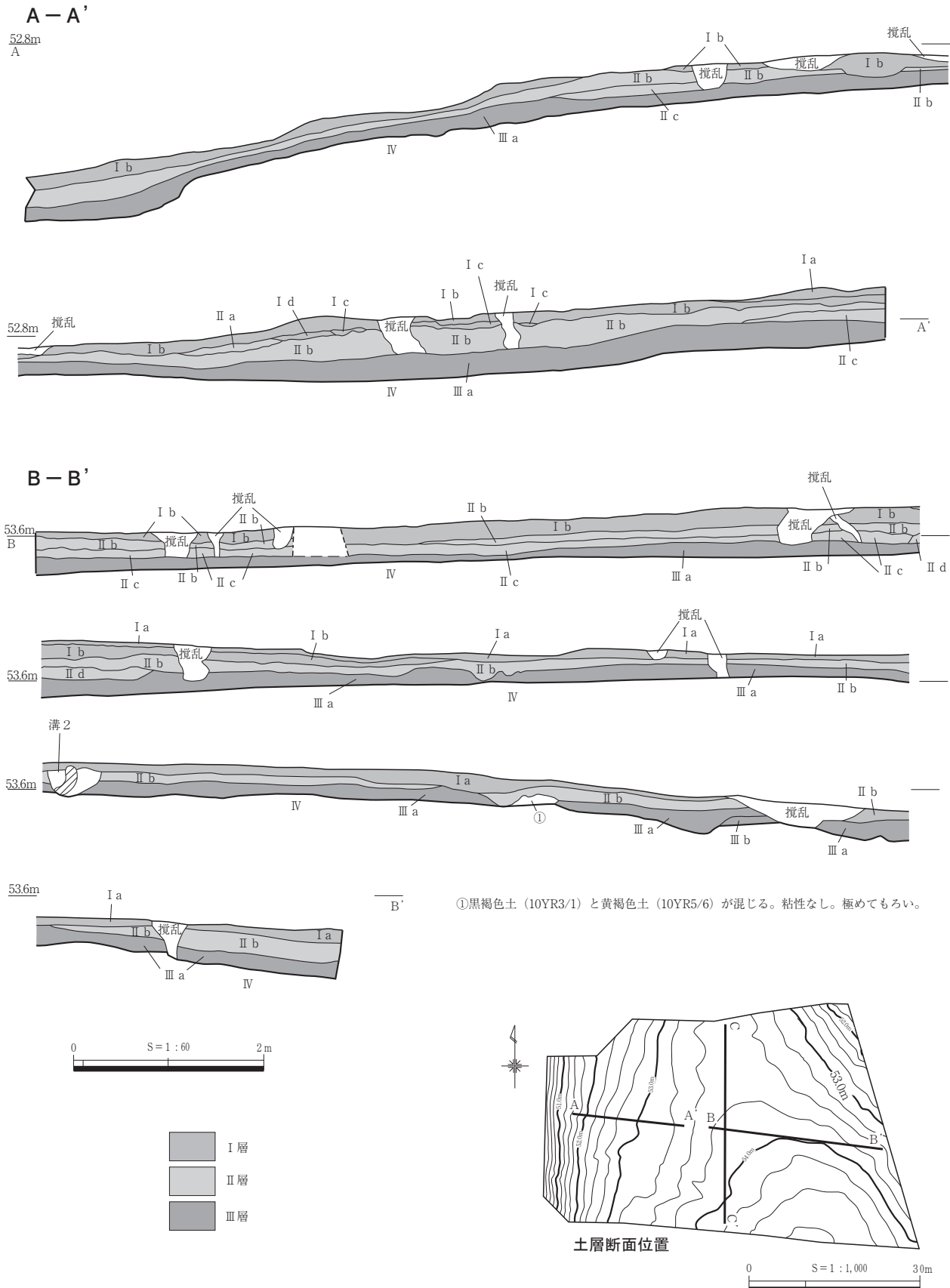


※調査後地形測量図に遺構図を合成

第38図 遺構配置図

られる。調査地のほぼ全面に堆積しており、明暗により4層に分層した。上面は溝1～3・土坑7の遺構検出面である。縄文時代・古墳時代の遺物を含んでいる。出土遺物の下限は、古墳時代前期である。

II a：褐色土(10YR4/4)。しまりなし。部分的に確認した。



第39図 調査地内の土層断面(1)

第4章 下市前築地遺跡の調査

IIb：褐色土(10YR4/4)。3～5mm大の礫を含む。粘性なし。ややしまる。遺物の密度は低いが、縄文土器、土師器が出土した。

IIc：暗褐色土(10YR3/3)含有物ほかbと同じ。調査地の西半、緩やかに西側を下る斜面に堆積する。縄文土器が出土した。

IIId：黄褐色土(2.5Y5/3) 2～3mm大の炭化物粒を含む。粘性なし。ややしまる。平面的には不整形な広がりとして堆積する。

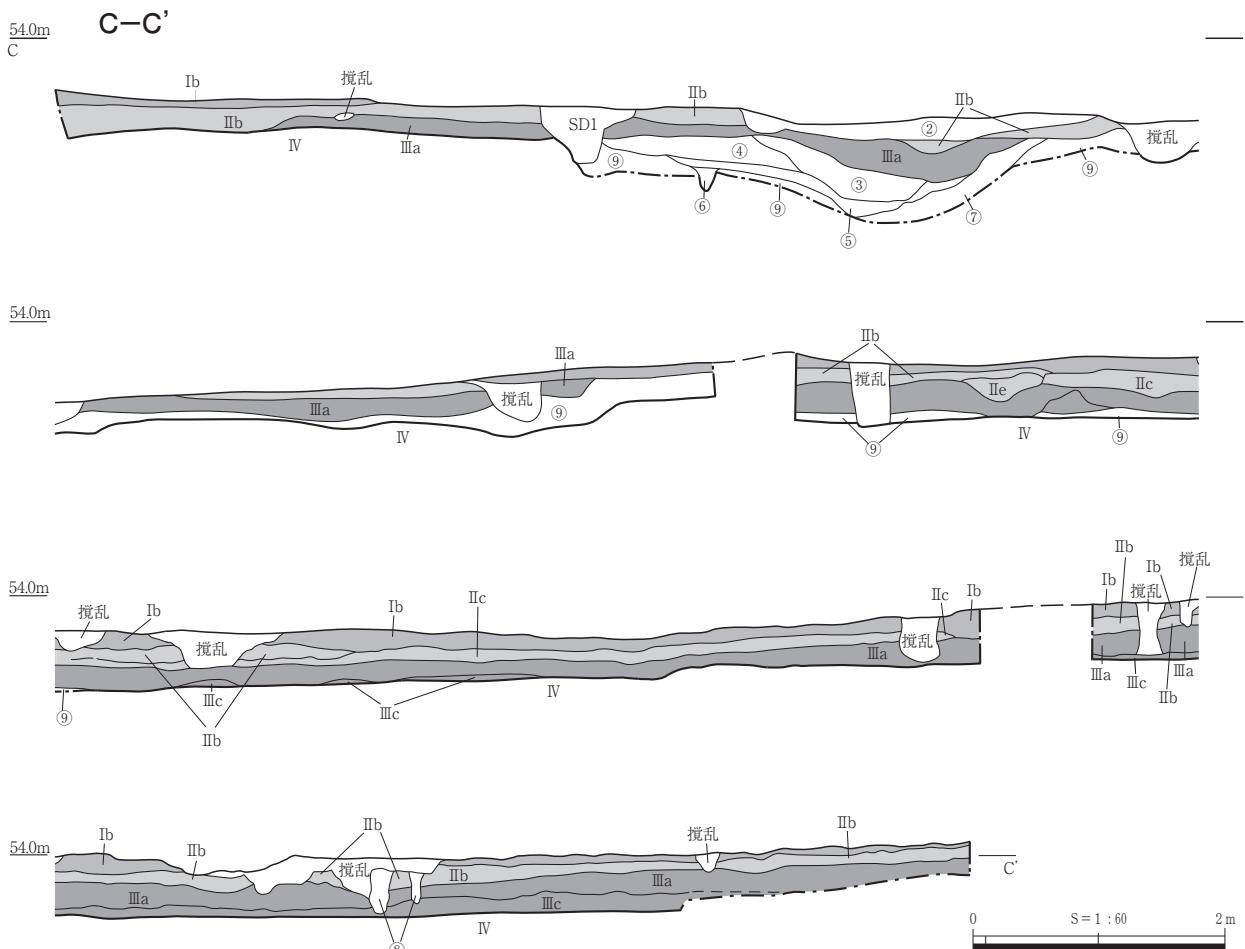
III層：黒褐色系の層。II層と地山であるIV層との間に位置する。ロームブロックを含み、よくしまる。上面は古墳時代前期の遺構検出面である。調査地中央の頂部付近での堆積はやや薄い。明暗、礫の多少等から3層に分層した。いずれも遺物は出土していない。

IIIa：黒褐色土(10YR2/3) 1～3mm大の礫を多く含む。よくしまる。粘性なし。

IIIb：黒褐色土(10YR2/3) III aよりも色調が若干明るい。しまり、含有物ほかIII aと同じ。調査地の西側で部分的に確認した。

IIIc：黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(2.5Y5/3)とが混在する。しまりあり。礫を多く含み、粘性は弱い。

IV層：黄褐色土(2.5Y5/3)いわゆる地山層。



- ②明黄褐色土(2.5Y5/2)固くしまる。粘性なし黒褐色土(10YR3/1)を
- ③黒褐色土(10YR3/1)固くしまる。粘性なし。径5～10cmの暗灰黄色土(2.5Y5/2)ブロック、径2～3mmの小礫を含む。
- ④黒褐色土(10YR3/1)しまる。粘性あり。パラス状。径2～3mmの小礫を多く、径5～10cmの石を含む。
- ⑤黒褐色土(10YR3/1)粘性なし。IIIa層よりやや明るい。
- ⑥黒褐色土(10YR3/1)しまる。粘性あり。径2～3mmの礫を含む。
- ⑦暗灰黄色土(2.5Y5/2)固くしまる。粘性なし。パラス状。黒褐色土(10YR3/1)を少量含む。
- ⑧黒褐色土(10YR3/1)ややしまる。粘性なし。径2～3mmの小礫を含む。
- ⑨暗灰黄色土(2.5Y5/2)しまりなし。もろい。径5～6mmの小礫の集まり。

第40図 調査地内の土層断面(2)

第2節 調査の概要

下市前築地遺跡では、縄文時代・古墳時代を中心とする遺構・遺物を確認した。遺構は縄文時代と推定される土坑6基、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、時期不明のテラス状遺構1基、溝3条、土坑1基、ピット4基を検出した。縄文時代の土坑のうち4基は落とし穴と判断している。古墳時代前期の竪穴住居跡から甑形土器⁽¹⁾、甕、高坏が出土した。

遺物は総量でコンテナ14箱であった。縄文土器(早～後晩期)、土師器(古墳時代前期・平安時代前期)、須恵器(平安時代前期)、磨石、石皿が遺構内及びⅠ・Ⅱ層中から出土した。

(1)この土器の呼称については、1980年に桑原隆博氏が論文中に示した資料の集成表に「山陰型甑形土器」と用いられて以来、広く用いられているが、型式名の定義が特に設定されているわけではないため、本報告では「甑形土器」と呼称する。

桑原隆博 1980「三次市内出土の所謂「山陰型の甑形土器」について」『芸備』第10集

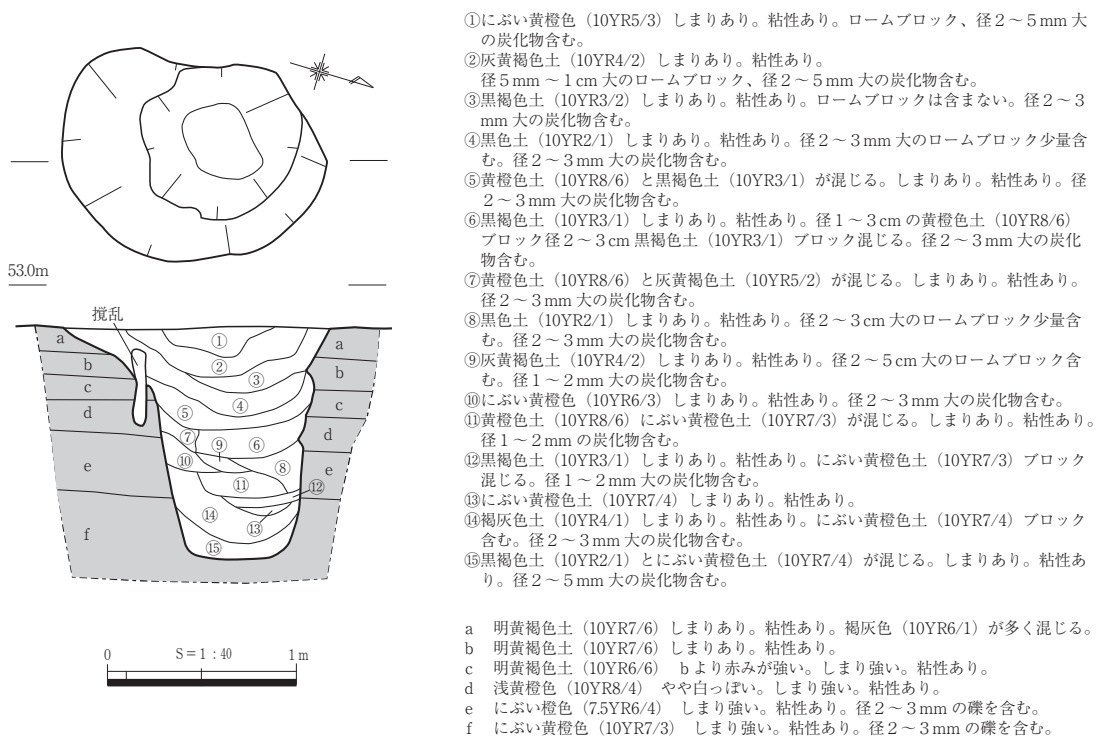
第3節 縄文時代の調査

1 概要

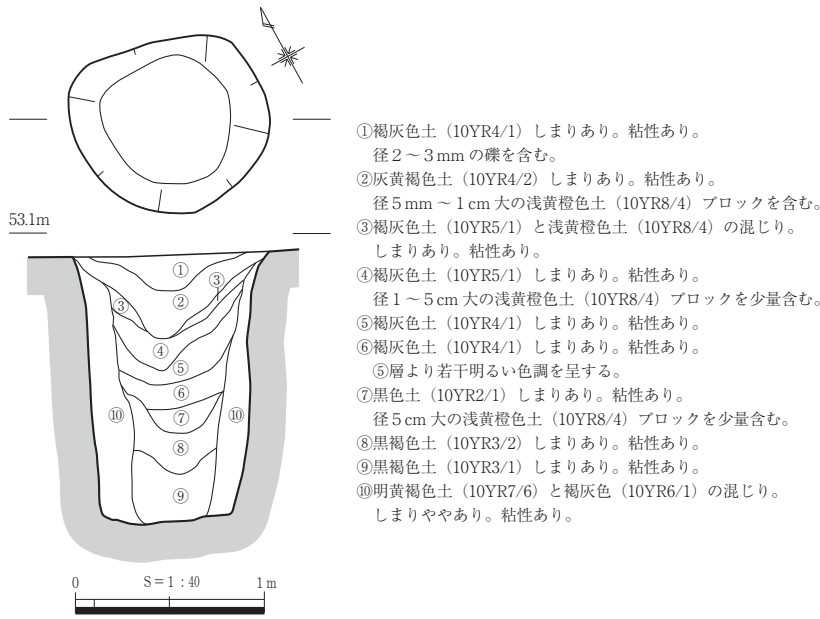
落とし穴4基、性格不明の土坑2基を調査した。遺構を検出したのは地山(Ⅳ層)上面である。いずれの遺構もⅢ層に由来する埋土が主体となる。遺構底面の埋土から検出した炭化物片の放射性炭素年代測定の結果(第4章第7節)、縄文時代中期前半であったことから、黒褐色系の埋土をもつ遺構の時期はおおよそこの時期の遺構と判断している。

Ⅰ・Ⅱ層中から縄文時代早期・前期・中期の土器や、磨石や石皿といった石器が出土している。先述のとおり層位的な上下関係が遺物の時期差を示しておらず、これらの層は周辺地から流入したものと考えられ、調査地内ではなく、調査地周辺の様相を示す遺物である。

落とし穴を検出したことから、遺跡の周辺が狩猟場として利用された時期がある一方、石皿や磨石などの出土遺物から、遺跡の周辺に集落が営まれていた時期のあったことが考えられる。

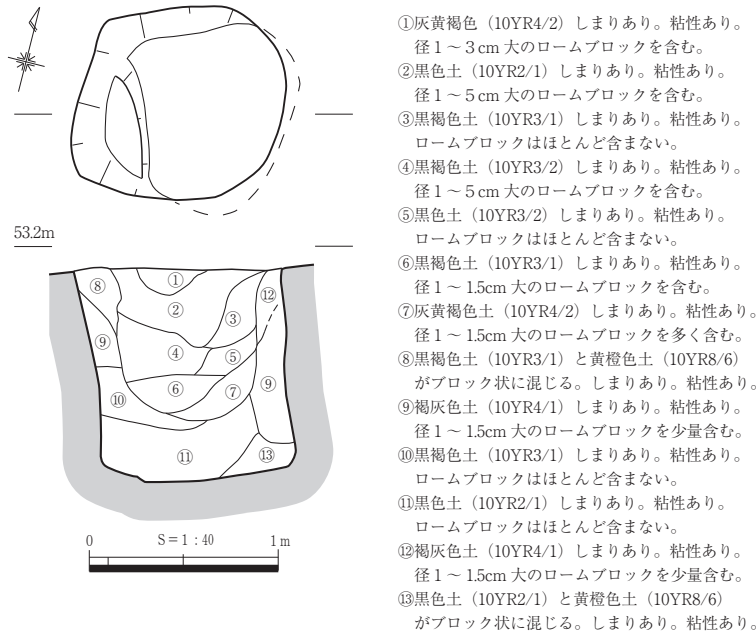


第41図 土坑1



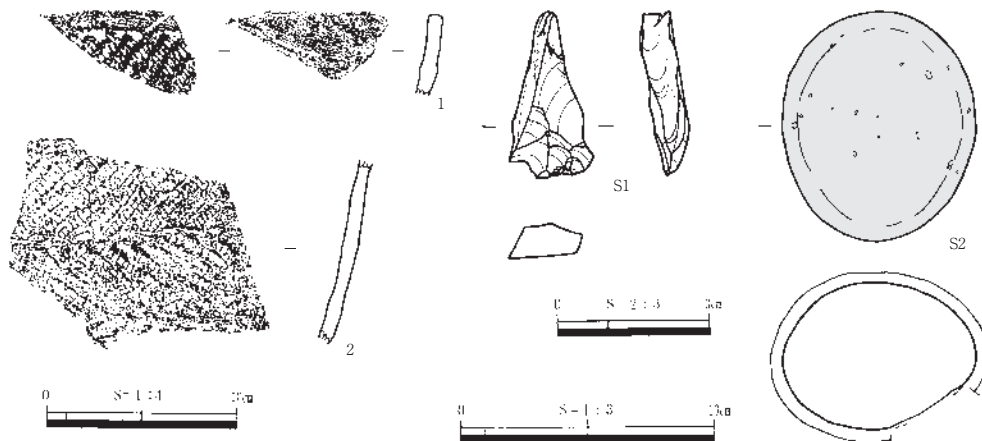
- ① 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
径2～3mmの礫を含む。
- ② 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。
径5mm～1cm大の浅黄橙色土 (10YR8/4) ブロックを含む。
- ③ 褐灰色土 (10YR5/1) と浅黄橙色土 (10YR8/4) の混じり。
しまりあり。粘性あり。
- ④ 褐灰色土 (10YR5/1) しまりあり。粘性あり。
径1～5cm大の浅黄橙色土 (10YR8/4) ブロックを少量含む。
- ⑤ 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑥ 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑦ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。
径5cm大の浅黄橙色土 (10YR8/4) ブロックを少量含む。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり。粘性あり。
- ⑨ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑩ 明黄褐色土 (10YR7/6) と褐灰色 (10YR6/1) の混じり。
しまりややあり。粘性あり。

第42図 土坑1



- ① 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。
径1～3cm大のロームブロックを含む。
- ② 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。
径1～5cm大のロームブロックを含む。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
ロームブロックはほとんど含まない。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり。粘性あり。
径1～5cm大のロームブロックを含む。
- ⑤ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。
ロームブロックはほとんど含まない。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
径1～1.5cm大のロームブロックを含む。
- ⑦ 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。
径1～1.5cm大のロームブロックを多く含む。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) と黄橙色土 (10YR8/6) がブロック状に混じる。しまりあり。粘性あり。
- ⑨ 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
径1～1.5cm大のロームブロックを少量含む。
- ⑩ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
ロームブロックはほとんど含まない。
- ⑪ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。
ロームブロックはほとんど含まない。
- ⑫ 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
径1～1.5cm大のロームブロックを少量含む。
- ⑬ 黒色土 (10YR2/1) と黄橙色土 (10YR8/6) がブロック状に混じる。しまりあり。粘性あり。

第43図 土坑2



第44図 土坑3出土遺物

2 遺構

土坑1 (第41図、表6、PL.20)

E 2 グリッドの北東、標高52.7mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の灰黄褐色土の広がりを検出した。

平面形は楕円形で、径1.06～1.39m、検出面からの深さは1.24mを測る。底面ピットは存在しない。埋土は15層に分けられ、黒褐色から褐灰色土を主体とする。遺物は出土していない。形態的特徴や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

土坑2 (第42図、表6、PL.21)

F 2 グリッドの南西、標高52.9mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の褐灰色土の広がりを検出した。

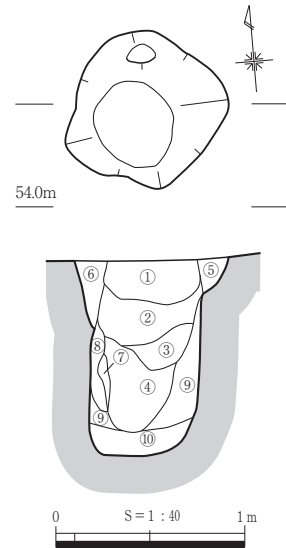
平面形は円形で、径0.94～1.08m、検出面からの深さは1.43mを測る。底面ピットは存在しない。埋土は10層に分けられ、中央では下層は黒褐色、上層は

褐灰色土を主体とし、掘り方の際は明黄褐色土を主体とする。遺物は出土していない。形態的特徴や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

土坑3 (第43・44図、表6、PL.21・30)

E 3 グリッドの中央北、標高53.1mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の黒色土の広がりを検出した。平面形は円形で、径1.04～1.07m、検出面からの深さは1.13mを測る。底面ピットは存在しない。埋土は13層に分けられ、黒褐色土を主体とする。埋土上層から縄文土器1・2、黒曜石の楔形石器S 1、磨石S 2が出土した。縄文土器1・2は同一個体の可能性がある。2は羽状縄文を地文とするものであり、縄文時代前期中葉に相当すると考える。S 1は黒曜石製である。S 2は磨面が全面に及んでいる。これらの遺物はいずれも埋土上層からの出土であるため、埋土が堆積する過程で入り込んだものと考えられる。出土遺物及び形態的特や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

なお、埋土最下層から採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施している。補正年代値で4465±25yrBP(PLD-17616)と縄文時代中期前半という結果を得た。

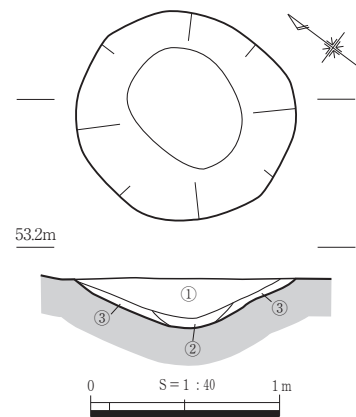


- ①黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。径2～5mm大のロームブロックを含む。
- ②褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。
- ③灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。
- ④黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑤にぶい黄褐色土 (10YR6/3) と褐灰色土 (10YR4/1) の混じり。しまりあり。粘性あり。
- ⑥褐灰色土 (10YR6/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑦にぶい黄橙色土 (10YR5/3) しまりあり。粘性あり。
- ⑧にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまりあり。粘性あり。
- ⑨黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性あり。
- ⑩灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。

第45図 土坑4

土坑4 (第45図、表6、PL.21)

F 4 グリッドの中央西端、標高53.7mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の黒褐色土の広がりを検出した。平面形は円形で、径0.78～0.89m、検出面からの深さは1.04mを測る。底面ピットは存在しない。埋土は10層に分けられ、黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。形態的特徴や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。



- ①黒褐色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。径2～3mm大の礫を含む。
- ②褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。径2～3mm大の礫を含む。
- ③褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり。粘性あり。径2～5cm大のロームブロックを含む。

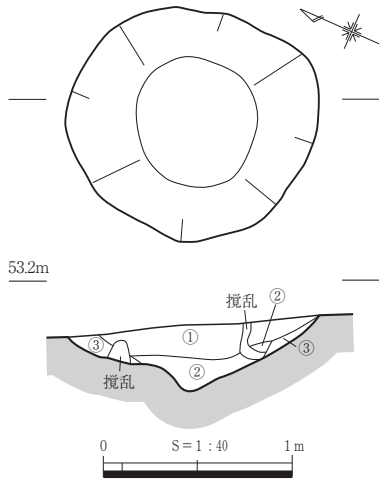
第46図 土坑5

土坑5 (第46図、表6、PL.22)

E 3 グリッドの北西、標高53.0mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の黒褐色土の広がりを検出した。平面形は円形で、径1.08～1.16m、検出面からの深さは0.27mを測る。断面形は船底状を呈する。埋土は3層に分けられ、黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。埋土から時期は縄文時代と考える。底面の形状や土坑1～4ほど深くないことから、落とし穴とは考えていない。遺構の性格は不明である。

土坑6 (第47図、表6、PL.22)

F 2 グリッドの南西隅、標高52.9mの緩斜面に位置する。Ⅲ層を除去後、地山(Ⅳ層)上面で円形の黒色土の広がりを検出した。平面形は円形で、径1.19～1.38m、検出面の深さは0.39mを測る。断面形は不整で埋土は3層に分けられ、黒色土を主体とする。遺物は出土していない。埋土から時期は縄文時代と考える。底面の形状や土坑1～4ほど深くないことから、落とし穴とは考えていない。遺構の性格は不明である。



- ①黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。
- ②黒色土 (10YR2/1) と灰黄褐色土 (10YR4/2) との混じり。しまりあり。粘性あり。
- ③灰黄褐色 (10YR4/2) しまりあり。粘性あり。径1～2cm 大の黄橙色土ブロック少量混じる。

第47図 土坑6

表6 土坑1～6一覧

遺構名	グリッド	平面	規模 (cm)	深さ (cm)	底面規模 (cm)	備考
土坑1	E 2	円形	106～139	124	43～63	
土坑2	F 2	円形	94～108	143	69～79	
土坑3	E 3	円形	104～107	113	90～103	年代測定実施
土坑4	F 4	円形	78～89	104	41～49	
土坑5	E 3	円形	108～116	27	52～67	
土坑6	F 2	円形	119～138	39	63～71	

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (第48図、表7、PL.29)

I層・II層から縄文時代早期中葉から後晩期までの土器が出土している。先述のとおり二次堆積であるI層・II層はともに複数時期の遺物を含んでおり、層位的な前後関係が必ずしも遺物の前後関係を示すものではない。ここではI層・II層出土の縄文土器を一括して扱う。

押型文土器

3～11の9点を提示する。3は外面に山形文が横位に施文される。内面には施文がみられずナデによる調整が認められる。4と5はポジティブな楕円文が施文される。楕円文は長径5～6mm、短径2～3mmであり、横位に施文される。

6～10も、外面にポジティブな楕円文が施文されるが4や5に比べ、楕円文はやや粗大であり、長径6～7mm、短径4～5mm程度である。縦位の施文が多く、横位・斜位の施文もみられる。これらも内面にはナデによる調整がなされており、施文は認められない。

11は外面の風化が著しいため、施文や調整が確認できないが、内面には半截竹管によるものと思われる斜行沈線が認められる。

3～5は黄鳥式に該当する。これに比べ6～10は楕円文は粗大であるが、高山寺式に比べ、原体の単位は小さい。しかし、施文方向に縦位が主になる点を含め、黄鳥式より新しいものであることが分かる。11にみられる斜行沈線は高山寺式に特徴的なものであり、これに該当する⁽¹⁾。久保穰二郎氏の第I～IV期の押型文土器の分類(久保1991)によれば、3～5は第II期、6～10は第II期末～第III期、11は第III期に相当する。以上のことから、3～11は早期中葉から後葉に位置づけられる。



第48図 調査地内出土遺物(縄文土器)

口縁部に隆帯あるいは肥厚帯を有するもの

12は、口縁端に平行隆帯と垂下隆帯がTの字状につくものである。垂下隆帯は押圧して貼り付けられている。平行隆帯上にも垂下隆帯付近にも爪型文が施されている。このような隆帯をもつ当該期の土器は、井上智博氏によって「長山式」⁽²⁾と仮称されたものである(井上1991)。

13～15は、口縁部肥厚帯を有するもので刺突文が施される。このうち13には口縁内面の沈線が確認できる。16・17は隆帯上下に押し引き沈線を施すものである。井上智博氏は、西川津式をA式とB式に分類している(井上前掲)。13～15は西川津A式、16・17は西川津B式に該当する。内面は貝殻条痕による調整が確認されるものが多い。18は内外が貝殻条痕で調整されたのち横位の押し引き沈線が施文されている。19は半截竹管による爪形文で幾何学的な文様が施されている。18と19も施文の特徴などから西川津式に該当するものである。

山陰地方の縄文早期末から前期初頭の土器形式として、口縁部の隆帯が口縁部肥厚帯へと変遷することを指標に、長山式→西川津A式という型式変化が確認されている(中原1989)。12～19の土器群はこれら早期末から前期初頭に位置づけられるものである。

横位の爪形文をもつもの

20～23の4点を提示する。20～22は貝殻状の工具、23は半截竹管による施紋である。なお、20は口縁端部に刻みが施されている。内外面は貝殻条痕による調整がなされているものが多い。これらは前期前葉の北白川下層I式の範疇で捉えることができるものである。

内外が条痕で調整されているもの

24～30は文様はないが、内外面が条痕によって調整されているものである。

24は植物質工具による条痕で調整されている。このような調整は、長山式などにみられ手法として貝殻条痕のものより古相を示している可能性が指摘されており(小林2000)、あるいは早期末～前期初頭に位置づけられることも考えられる。

25～30はいずれも内外面が貝殻条痕によって調整されており、25・26では口縁端部に刻みが施されていることが分かる。外面と内面で調整の方向が異なること、内面では横方向の調整が多いことが確認できる。条痕の太さには差が認められる。内外に貝殻条痕による調整が施されるものとして、西川津式、羽島下層II式、北白川下層I式などがあげられる⁽³⁾。25～30もこれらいずれかに該当すると考えられ、前期初頭から前期前葉に位置づけられる。

縄文を地文とするもの

31～38は縄文を地文とするものである。このうち31～36は羽状縄文が施文されていることが確認できる。31・32は他のものと比べ、節が非常に細かい。なお31は羽状縄文の上に横位の沈線が施されている。37は外面は縄文、内面は貝殻条痕が施文されている。長山式に多くみられるような繊維の混入は認められない。38は太い条と細い条が交互に現れている。胎土や器形などの要素も含めて、これらの土器は、北白川下層II式など前期中葉にあたるものが主体であろうと考える。

その他

39は口縁部に爪型文が施され、体部には3条の沈線を1単位とした文様が施されている。中期末の

北白川C式に該当するが、特筆すべきは、内面に貝殻条痕による調整が施されることである。このような例は珍しく、地域的なバリエーションとして捉えるべきか、事例の増加が待たれる。

40・41は内外面ともナデで調整された口縁部である。41は口縁端部に刻みが施される他、外面に2条の横位の沈線が施される。42・43は粗製土器の口縁部である。42～44は外面に条痕、内面にナデによる調整がなされる。45は器種は不明であるが、外面に縄文の押しつけを「×」状に交差して施文している。これらの土器は、それぞれ胎土や色調、調整などから後晩期の可能性を示唆するにとどめておく。

細片のため図示していないものも含め、縄文土器については、施文・調整別に分類し、点数をカウントしている(表7)。刺突文や爪形文といった型式の認定をしやすい要素を優先的に分類した。小さな破片が多いため、本来の施文・調整を確認することが難しいものも多い。施文・調整が確認されるものでは貝殻条痕による調整をなされているものが多いことが分かる。刺突文・爪形文で分類したものにも貝殻条痕で調整されているものが多く含まれていることから、出土点数のなかで主体を占めるものであったといえる。

なお、これらの小片を含めた縄文土器の分布状況についての検討は後述する(第4章第8節)。

表7 縄文土器分類別点数一覧

出土遺構・層位	山形押型	楕円押型	押型文か	斜行沈線	隆帯文	刺突文	押引沈線	爪形文	内外植物条痕	外面植物条痕	内外貝殻条痕	外面貝殻条痕	内面貝殻条痕	羽状縄文	縄文地文	沈線文	外面条痕	その他	不明	計
竪穴住居跡1		9	8	1							1		1							20
土坑3												2	2	4	3				5	16
溝1		1																		1
I層		4					3		1	2	20	8	2	8	10	1	2	1	67	129
II層	1	4		1	1	6	1	5	6		30	8	1	7	15	1		3	70	160
不明									1	1	2	5		1	1				2	13
計	1	18	8	2	1	6	4	5	8	3	53	23	6	20	29	2	2	4	144	339

註

- (1) 久保穰二郎氏は鳥取県内出土の押型文土器を整理し、I～IV期の時期区分と押型文土器の変遷を明らかにした(久保1991)。黄鳥式が含まれるII期には施文方向が横位から縦位・斜位に変遷していくこと、II期末の楕円文の土器がIII期の高山寺式に発展することが確かめられた。高山寺式は粗大化した楕円文、内面の斜行沈線を指標とする。
- (2) 「長山式」に対して、小林青樹氏は早期末の隆帯文土器のうち、地文が縄文のものを、条痕のものに先行するものとして「福呂I式」、後続する条痕のものを「長山馬籠式」と設定した(小林前掲)。しかし、大山町名和飛田遺跡出土隆帯文土器の定量的な分析によって、地文が縄文のものと条痕のものが併存することが確かめられており(北2005)、長山式とすることが適当と考える。
- (3) 内外面が貝殻条痕によって調整された土器は、かつて山本清氏によって「佐太講武式」として設定され、早期末～前期初頭の年代が想定された(山本1961)。しかし、内外面を貝殻条痕で調整する手法は、西川津式においても普遍的に認められる要素であり、破片での判別は難しい。また、目久美遺跡の成果からこれら「佐太講武式」とされた土器は、西川津式に後続する前期前葉の羽島下層II式・北白川下層I式のバリエーションとして捉えられることが明らかとなった。(小原ほか1986、井上前掲)。いずれにせよ、これら内外面が条痕で調整された土器群は早期末～前期前葉の時期幅に収まると考える。

引用・参考文献

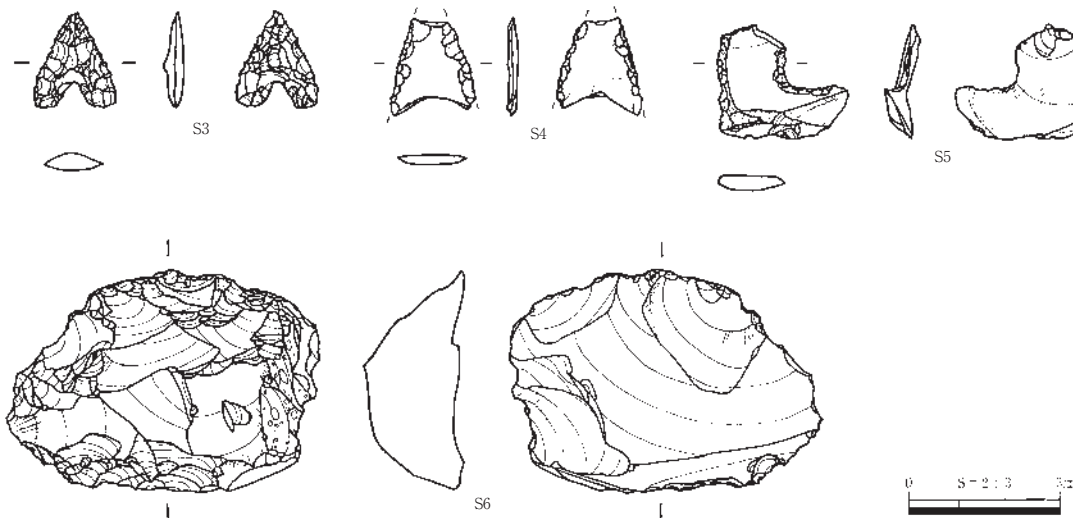
- 山本清 1961「西山陰の縄文式文化」『鳥根大学山陰文化研究紀要』第1号
 小原貴樹 1986『目久美遺跡』米子市教育委員会
 中原斉 1989「長山馬籠遺跡出土早・前期縄文土器の編年的位置づけ」『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会
 井上智博 1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会
 久保穰二郎 1991「鳥取県出土の押型文土器の様相」『鳥取県立博物館研究報告』第28号
 小林青樹 2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 北浩明 2005「第7節 縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について」『名和飛田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター

(2) 石器(第49・50図、PL.30・31)

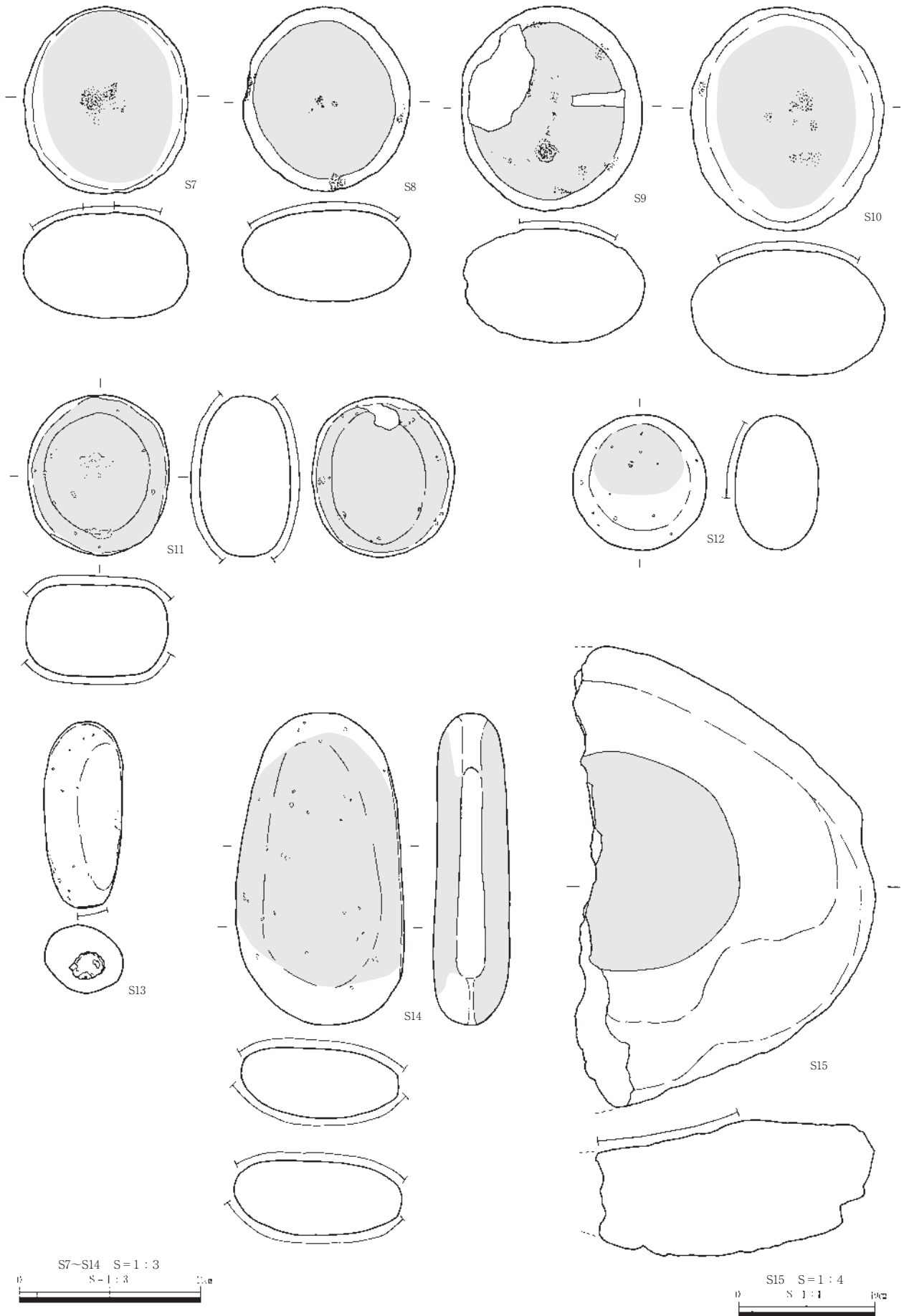
I層・II層からは剥片石器や礫石器が出土している。また、図示していないが黒曜石の微細な剥片が多数出土している。I層・II層の由来となる近隣地で石器の加工を行っていたことが推定できる。また、磨石及び石皿が出土していることから、一定期間存続する集落が近隣に広がっていたことが推定できる。

S3は黒曜石製の凹基式石鏃である。S4はサヌカイト製の平基式石鏃で、基部が欠損している。S5は黒曜石製のスクレイパーである。一方の側縁は直線状、もう一方は抉り状に急角度の調整で刃部を作り出している。S6は黒曜石製の石核である。

S7～S12・S14は粗粒の大山系の安山岩類(デイサイト・角閃石安山岩)を利用した磨石である。S7～S12は楕円形状を、S14は扁平な形状を呈している。S11・S14は両面に、他の磨石は片面のみに磨面がみられる。S14は両面の磨面によって右側面に明瞭な稜線が形成されている。S13は敲石である。片側端部に敲打痕が認められる。S15は石皿である。欠損しており残存するのは全体の半分程度とみられる。中央部分が大きく凹んでおり、使い込まれた製品であることがうかがえる。



第49図 調査地内出土遺物(石鏃・スクレイパー・石核)



第50図 調査地内出土遺物(磨石・敲石・石皿)

第4節 古墳時代の調査

1 概要

古墳時代前期前半の竪穴住居跡1棟を調査した。遺構を検出したのはⅢ層上面である。埋土はⅡ層に由来する褐色系である。調査地における竪穴住居跡は1棟のみであるが、その主体は調査地北側に広がる尾根上に立地することが予想される。遺物で特筆すべきなのは甑形土器で、住居跡の床面上から意図的に廃棄されたとみられる状況で出土した。

2 遺構

竪穴住居跡1(図51～53、表8、PL.22～25・31～33)

C2グリッド西にあたり、標高51.7～52.5mの緩斜面に位置する。隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。北側の一部が東西方向に延びる溝1によって切られている。規模は長軸5.7m、短軸5.2mを測る。Ⅲ層上面で検出した。検出面からの深さは0.54～0.74mで、床面積は23.65㎡である。埋土の堆積状況は、地形的に高い位置である南東側の住居壁際から北西方向へ黄灰褐色や黒褐色の土が堆積している状況であった。

床面には北西隅を除き貼床が施される。貼床は灰黄褐色土が斑状に混じる褐灰色土で、きわめて硬くしまっていた。なお、北側の一部は貼床の下に灰黄褐色を入れ、床面の高さを揃えていた。住居中央には中央ピット(P5)が設けられ、中央ピットの周りに、幅29～55cm、高さ5.2cmの周堤が全周する。平面形は円形、規模は径74～95cm、深さは周堤上面から0.51mを測る。中央ピットの使用に伴う痕跡は認められていない。

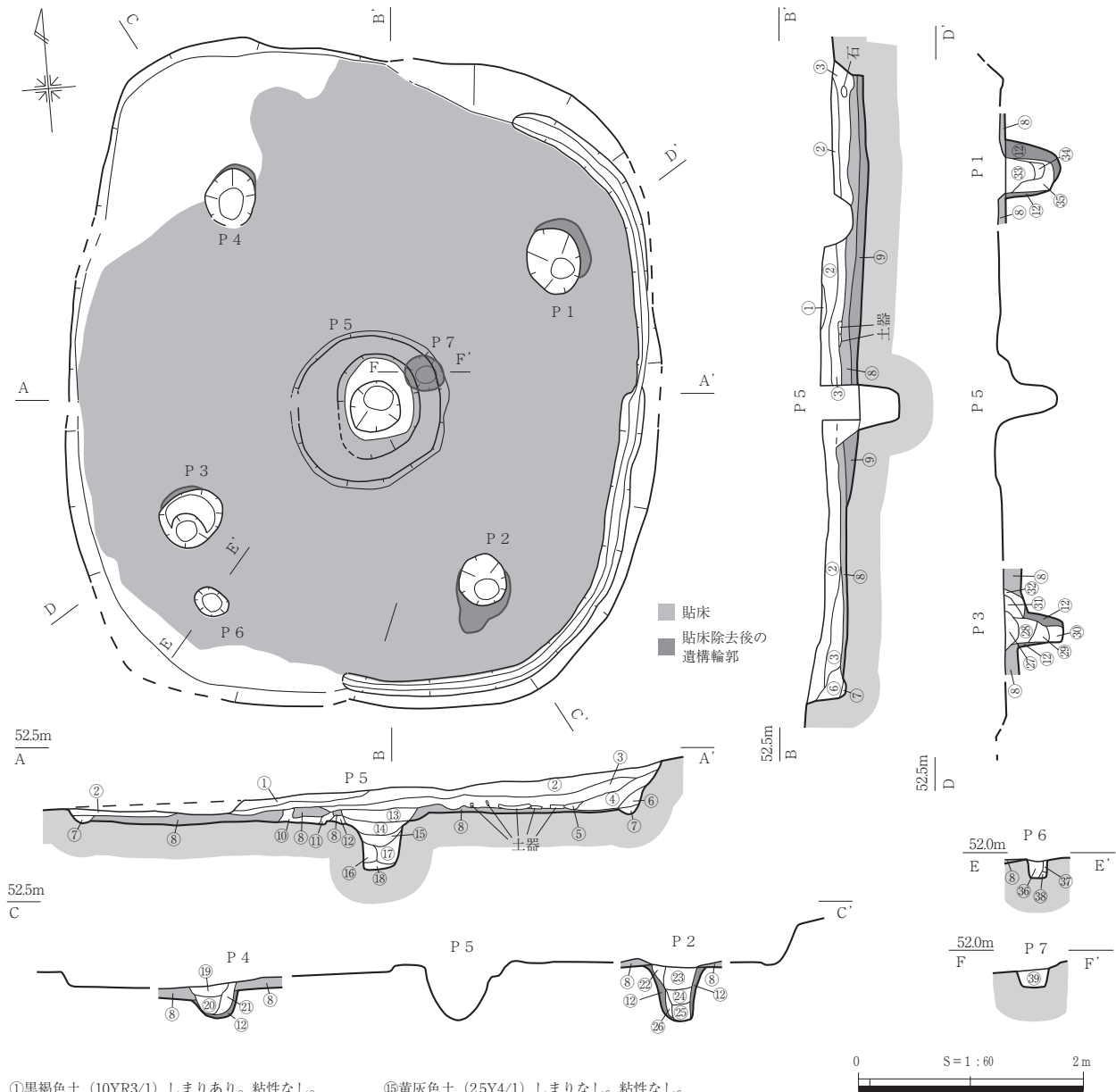
主柱穴は4本(P1～P4)で、いずれも床面の四隅付近に位置している。規模は径42～60cm、床面からの深さは33～56cmを測る。柱穴間は2.7～3.0mでほぼ等しい。柱の立て替えは行われていない。貼床を除去した後に柱穴の掘り方を確認した。柱を建てた後に土を込め、その上に貼床を施したことが確認できた。また、壁溝は、斜面の上側、住居東側のみで平面的に検出することができた。断面はU字状で、幅15～21cm、深さ3.8cmを測る。焼土は検出していない。

遺構内からは、甕(46～52)、高坏(53・54)、器台(55・56)甑形土器(57)、鉈(F1)が出土した。46～48・56が埋土上層、50・54が埋土下層、55が貼床中から出土し、他の土器は床面直上から出土した。この中で、土師器甕52、大型の高坏53、甑形土器57は住居東壁付近の床面直上から出土した。甑形土器57は埋土中からも出土した。この破片の多くは内面を天に向け、床面直上で出土しており、一部は住居内に散らばった状態で出土した。復元の結果、一部を欠くもののほぼ完全な形に復元することができた。52は57の上に重なって細片の状態で出土した。体部中位から口縁部までほぼ残存しているものの、底部付近は遺存していない。51は57の西隣から出土したが、遺存状況は良くない。53は57の南側のP2付近から、坏部内面を天に向けて出土した。復元した結果、大型の坏部は完存するものの脚はなく、遺構内及び調査地内からも出土していない。F1は鉈で埋土中からの出土であり、一部に木質が残存している。

これらの遺物は、埋土の上下に関わらず、形式的には大きな時期差は認められず、甑形土器も床面直上のものと埋土中のものが接合している。出土状況から、床面直上の遺物は住居の廃絶に伴っ

表8 竪穴住居跡1ピット一覧

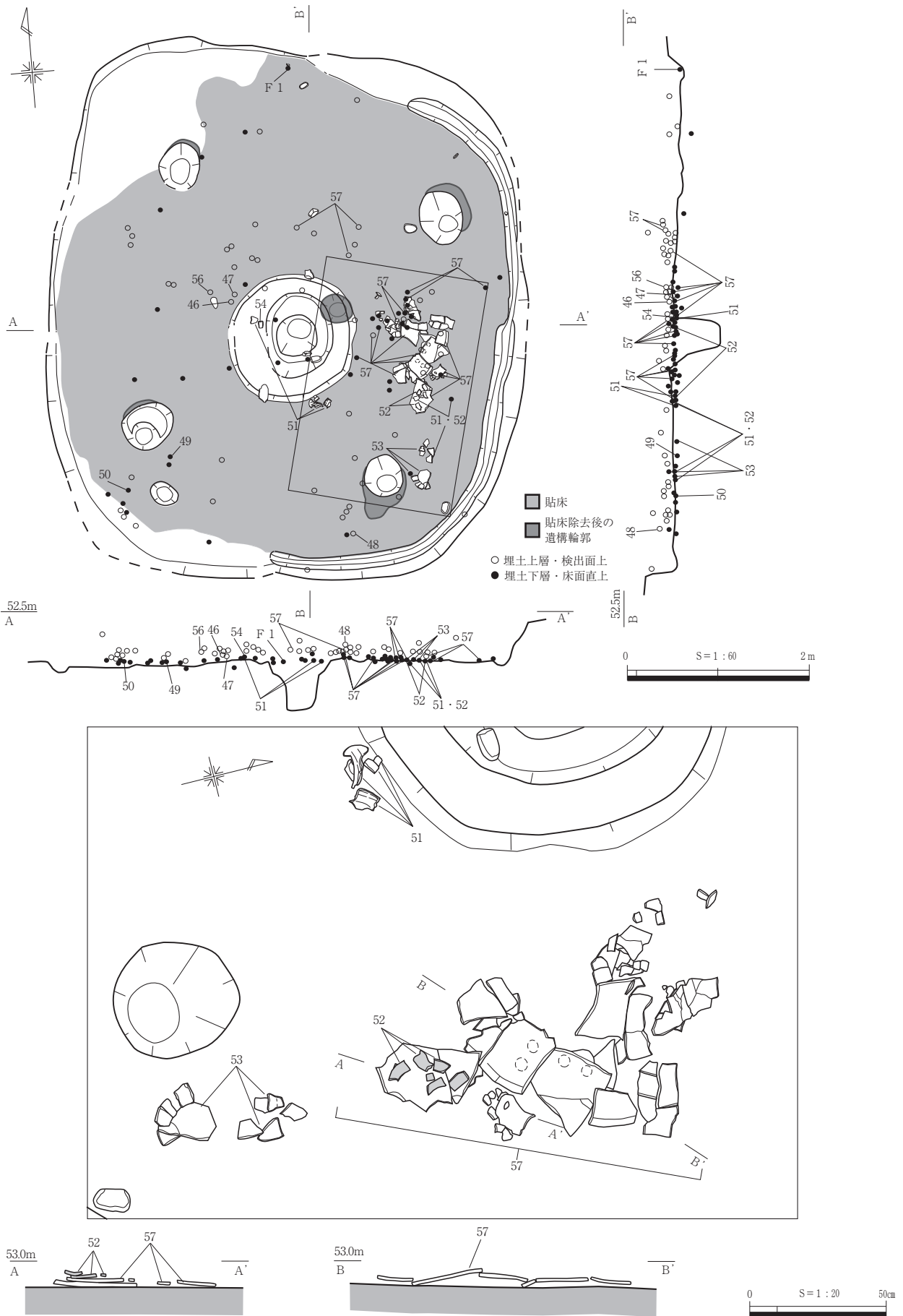
番号	径(cm)	深(cm)	備考
P1	48～60	50	
P2	42～46	56	
P3	50～58	54	
P4	44～51	33	
P5	74～95	54	中央ピット
P6	24～32	17	
P7	32～34	18	



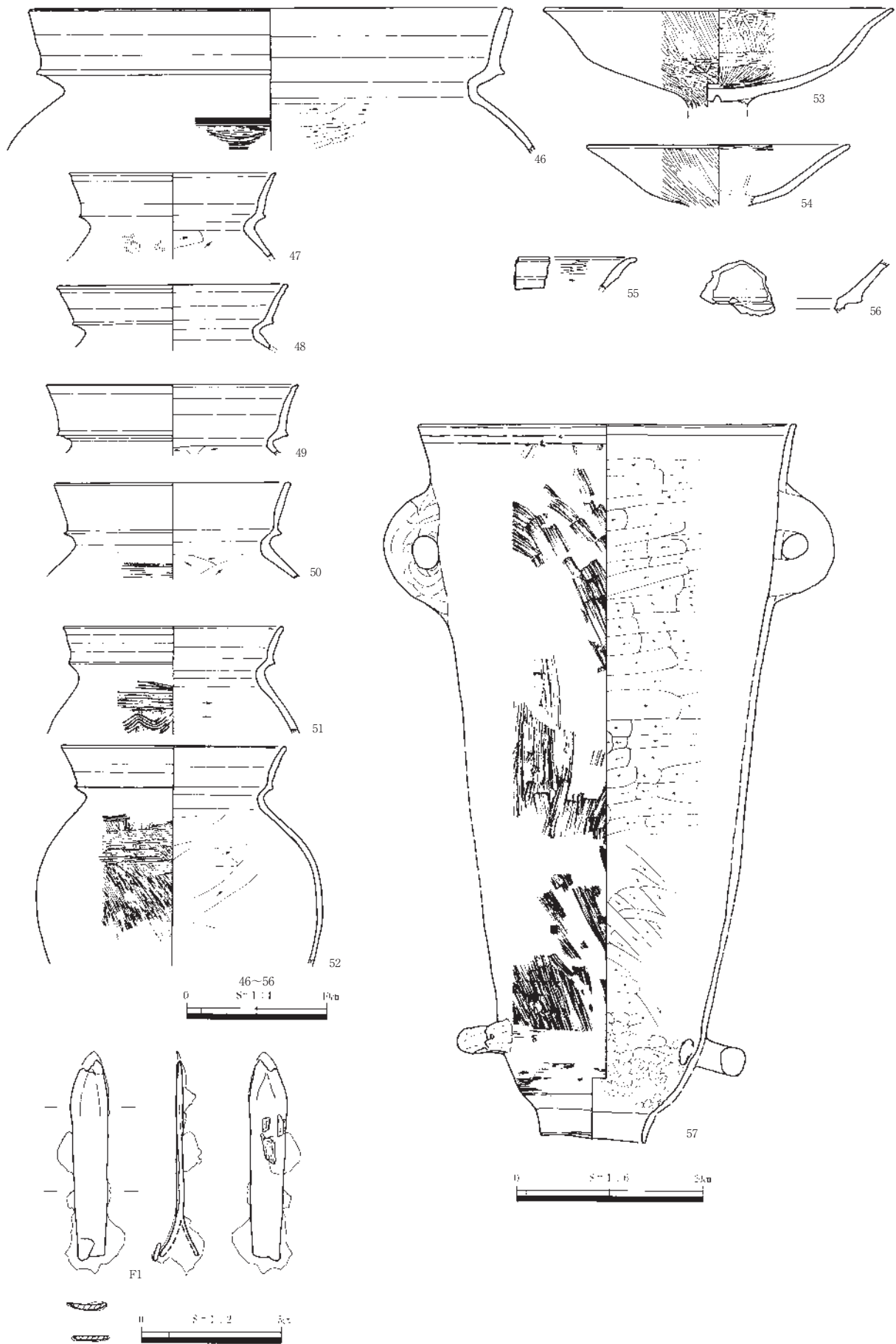
- | | | |
|--|---|--|
| <p>①黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性なし。
径1～5mm大の礫を含む。</p> <p>②灰黄褐色土 (10YR4/3) しまりややあり。粘性なし。
径1～3mm大の礫少量含む。</p> <p>③黒褐色土 (10YR3/2) しまりややあり。粘性なし。
径1～5mm大の礫を含む。</p> <p>④黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。粘性なし。
径1～5mm大の礫を含む。</p> <p>⑤黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。粘性なし。</p> <p>⑥黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり。粘性なし。
径1～5mm大の礫多く含む。</p> <p>⑦黒褐色土 (10YR3/1) しまりなし。粘性なし。
灰黄褐色土 (10YR6/2) が混じる。
径1～5mm大の礫を少量含む。</p> <p>⑧褐灰色土 (10YR5/1) と灰黄褐色土 (10YR5/2) が斑状に混じる。しまり極めて強い。粘性なし。
径5～6mm大の礫あり。</p> <p>⑨灰黄褐色土 (10YR6/2) と黄褐色土 (10YR8/4) が混じる。しまり極めて強い。粘性なし。(貼床)</p> <p>⑩灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。粘性なし。
径5mm大の炭化物を含む。</p> <p>⑪黒褐色土 (10YR3/1) しまりなし。粘性なし。
径2～5mm大の炭化物含む。</p> <p>⑫暗黄褐色土 (2.5Y5/2) と褐灰色土 (10YR4/1) の混じり。しまりなし。粘性なし。</p> <p>⑬黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりなし。粘性なし。
径5～6mm大の炭化物を含む。</p> <p>⑭黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりなし。粘性なし。
径3～4cm大の石あり。
径2～3mm大の炭化物含む。</p> | <p>⑮黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりなし。粘性なし。
径2～3mm大の炭化物含む。</p> <p>⑯暗黄褐色土 (2.5Y4/2) と暗黄褐色土 (2.5Y5/2) が混じる。しまりなし。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>⑰暗黄褐色土 (2.5Y5/2) しまりややあり。粘性なし。</p> <p>⑱暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりなし。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>⑲暗黄褐色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>⑳黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。
径5～6mm大の石あり。</p> <p>㉑暗黄褐色土 (2.5Y5/2) しまりあり。粘性なし。
径1～2mm大の礫わずかに含む。</p> <p>㉒黒褐色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉓黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を多く含む。</p> <p>㉔黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の炭化物を含む。</p> <p>㉕黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。
径5cm大の石あり。</p> <p>㉖黄灰色土 (2.5Y5/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉗浅黄色土 (2.5Y7/3) しまりなし。粘性なし。
黄灰色土 (2.5Y6/1) を含む。
径2～3mm大の礫を含む。</p> | <p>㉘黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉙黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉚黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉛黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉜暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉝暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㉞暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径1～2mm大の礫を含む。</p> <p>㉟暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㊱黄灰色土 (2.5Y4/1) 径3cm程度の炭化物を含む。径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㊲浅黄色土 (2.5Y7/3)
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㊳黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりややあり。粘性なし。</p> <p>㊴黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりあり。粘性なし。
径1～2mm大の礫を含む。</p> <p>㊵暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径2～3mm大の礫を含む。</p> <p>㊶暗黄褐色土 (2.5Y4/2) しまりあり。粘性なし。
径1～2mm大の礫を含む。</p> <p>㊷黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりあり。粘性なし。
径5mm～2cm大の礫を含む。</p> |
|--|---|--|

第51図 竪穴住居跡 1

第4章 下市前築地遺跡の調査



第52図 竪穴住居跡1 遺物出土状況



第53図 豎穴住居跡1出土遺物

第4章 下市前築地遺跡の調査

て廃棄されたものとする。時期は青木編年Ⅶ期(古)、天神川編年Ⅱ期の古墳時代前期初頭に位置づけられる。

3 遺構外出土遺物

古墳時代の遺物(第54図、PL.33)

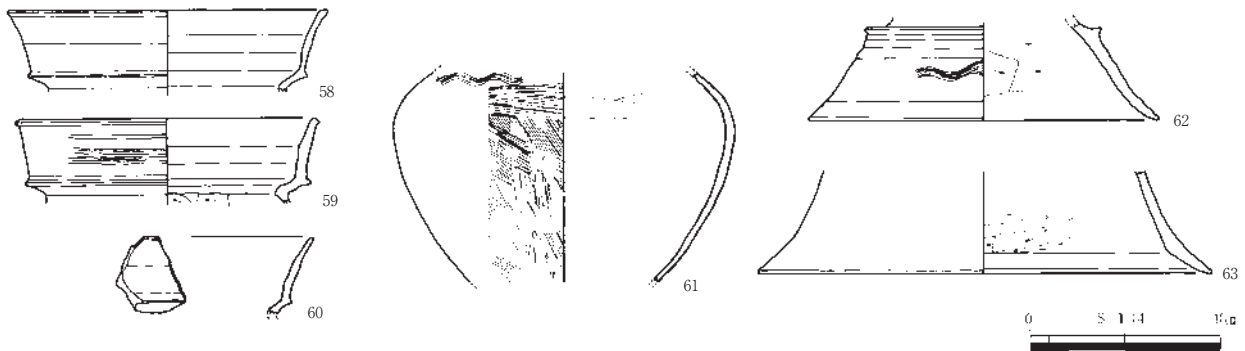
古墳時代の遺物は、多くが調査地の南西側からの出土である。また、58の一部がⅡ層から出土したが、他は全てⅠ層からの出土である。ただし、Ⅰ層からは縄文時代、古代、中世の幅広い時期の遺物が出土しており、古墳時代の土器の占める割合は高くはない。甕58～61、器台62・63を図化した。いずれも竪穴住居跡1とはほぼ同時期の所産である。ただし、これらの土器の出土位置は竪穴住居跡1から南側に10m以上離れており、周囲に古墳時代の遺構も確認できていない。Ⅰ層の由来は明らかではないが、調査地周辺に竪穴住居跡1と同時期の遺跡の広がりを推測することができる。

第5節 平安時代以降の遺物(第55・56図、PL.33)

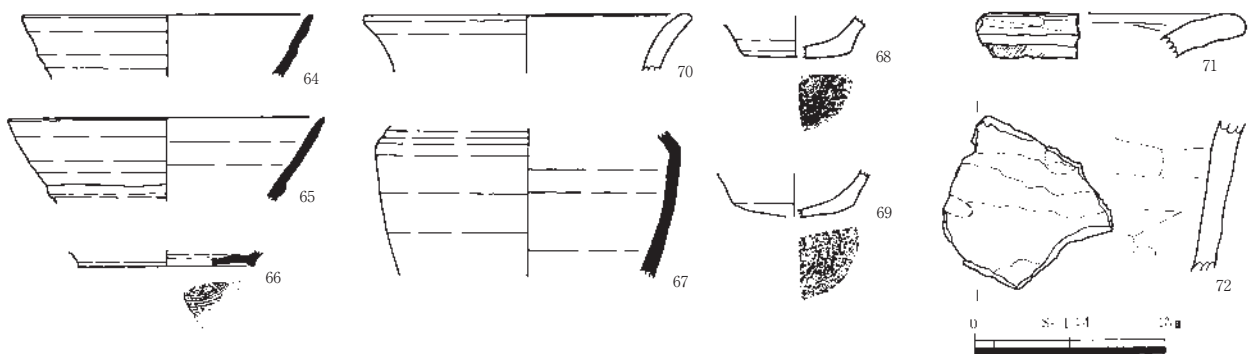
Ⅰ層から古代の遺物が出土している。調査地の東側に南東方向から北西方向に緩い尾根の頂部が延びるが、古代の土器はこの尾根の頂部西側から70が出土したほかは、Gラインより東側の東に向かう緩い傾斜面付近から出土している。

図化した遺物の組成は、須恵器の坏2点、高台付坏1点、壺1点で、これが須恵器のほぼ全個体である。土師器は坏2点、甕3点を図化した。そのほかの多くは甕の体部片で、70のような小型のものは少なく、71・72のような大型で器壁の厚いものが多くを占める。

遺物の時期は須恵器の形状あるいは焼成が軟質であること、体部中位に断面三角形の突帯をもつ



第54図 I・Ⅱ層出土遺物(古墳時代)



第55図 I層出土遺物(平安時代)

65があり、66の高台が断面三角形状で口縁部の立ち上がり際に貼り付けられていること等から、いずれも概ね9世紀後半頃の所産である。また、土師器の坏においても68・69はいずれも底部回転ヘラ切り後調整を施しており、外面の赤彩については剥落が著しく不明瞭であるが、形状・手法等から伯耆国庁第Ⅱ段階SK05並行期のもので、須恵器の年代観ともほぼ一致する。



第56図 I層出土銭貨

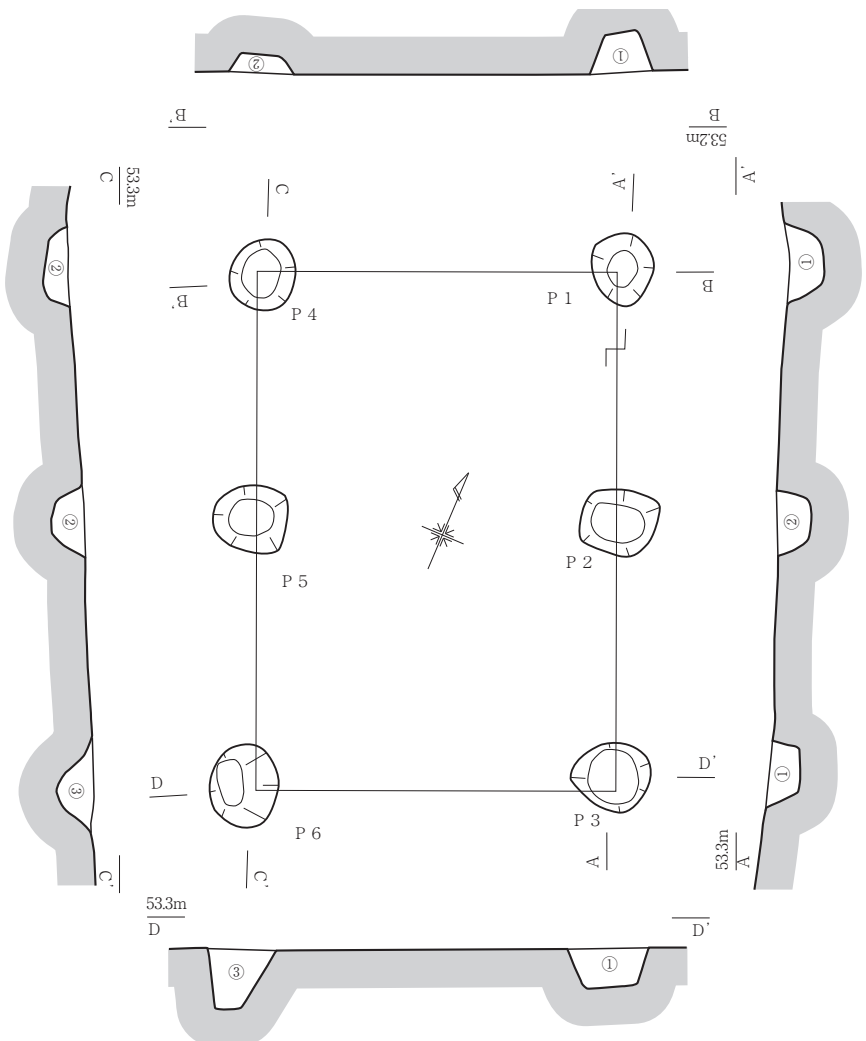
このように個々の遺物のもつ時期幅は広くはないものの、調査地内では当該期の明確な遺構は確認できずI層の由来も明らかではないことから、付近に平安前期における短期間の遺跡の存在を予想するに留まる。

また、C4グリッド北西のI層中から、銭貨B1が出土した。「嘉祐元寶」で書体は真書である。北宋銭で初鑄年は1056年であるが、模鑄銭が作られ、近世まで使用されているため、時期を絞り込むことは難しい。I層はこれ以降に堆積が終了した層である。

第6節 時期不明の遺構

1 概要

掘立柱建物跡1棟、テラス状遺構1基、溝3条、土坑1基、ピット4基を調査した。Ⅱ層(褐色土)上面では、土坑1基、溝3条を検出した。掘立柱建物跡とピット1～4はいずれも地山(Ⅳ層)で検出した。



掘立柱建物跡1(第57図、表9、PL.26)

F3グリッドの北東端からG3グリッドにかけて、標高53.0～53.1mの緩斜面に位置する。Ⅲ層除去後、地山(Ⅳ層)上面で検出した。1間×2間、梁行1.9m、桁行2.75m、

表9 掘立柱建物跡1ピット一覧

番号	グリッド	径(cm)	深(cm)
P1	F2	34～39	22
P2	F3	35～40	19
P3	F3	38～44	21
P4	E3	37～45	22
P5	E3	36～40	19
P6	E3	35～39	13

- ① 灰黄褐色土(10YR4/2)しまりややあり。粘性あり。径5mm～5cm大の黄橙色土(10YR7/8)ブロックを含む。
- ② 灰黄褐色土(10YR4/2)しまりややあり。粘性あり。径5mm～3cm大の黄橙色土(10YR7/8)ブロックを含む。径2～3mm大の炭化物を含む。
- ③ 灰黄褐色土(10YR4/2)しまりややあり。粘性あり。径1～2mm大の炭化物を若干含む。

第57図 掘立柱建物跡1

面積は約5.2㎡を測る。主軸はN-23.1°-W、柱穴の規模は径34～45cm、検出面からの深さは13～22cmを測る。埋土はいずれも単層で、いずれもⅡ層由来の灰黄褐色土が入ることから、Ⅱ層堆積開始後に掘り込まれたと考える。柱痕は確認できない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

テラス状遺構 1 (第58図、PL.26)

B3グリッド、調査地の西側斜面地に位置する。Ⅱ層直下の地山(Ⅳ層)上面で検出した。遺構の位置する周辺は斜面部でⅢ層が堆積しておらず、本来の遺構面はⅢ層上面と同一面であった可能性がある。南側が根によって大きく攪乱されており全体形は明らかでないが、平面形は楕円形状を呈していたと推定する。北西-南東方向で径6.6mを測り、埋土は20cm程度堆積していた。北東部に溝状の掘り込み、中央部に土坑状の掘り込みがある。このほかに遺構内外にピットがないか入念に精査したが存在しなかった。溝状の掘り込みは検出した範囲で長さ3.65m、幅0.78～1.1m、深さ0.28mを測る。中央の土坑の掘り込みは長径1.75m、短径1.24m、深さ0.34mを測る。溝状の掘り込み及び中央の土坑は遺構内の埋土(⑦・⑧)を掘削しており、テラス床面の掘削後、ある程度埋土が堆積した後に掘り込まれたものと考えている。出土遺物はなく、遺構の時期・性格については不明である。



第58図 テラス状遺構 1

溝1 (第59～61図、PL.27)

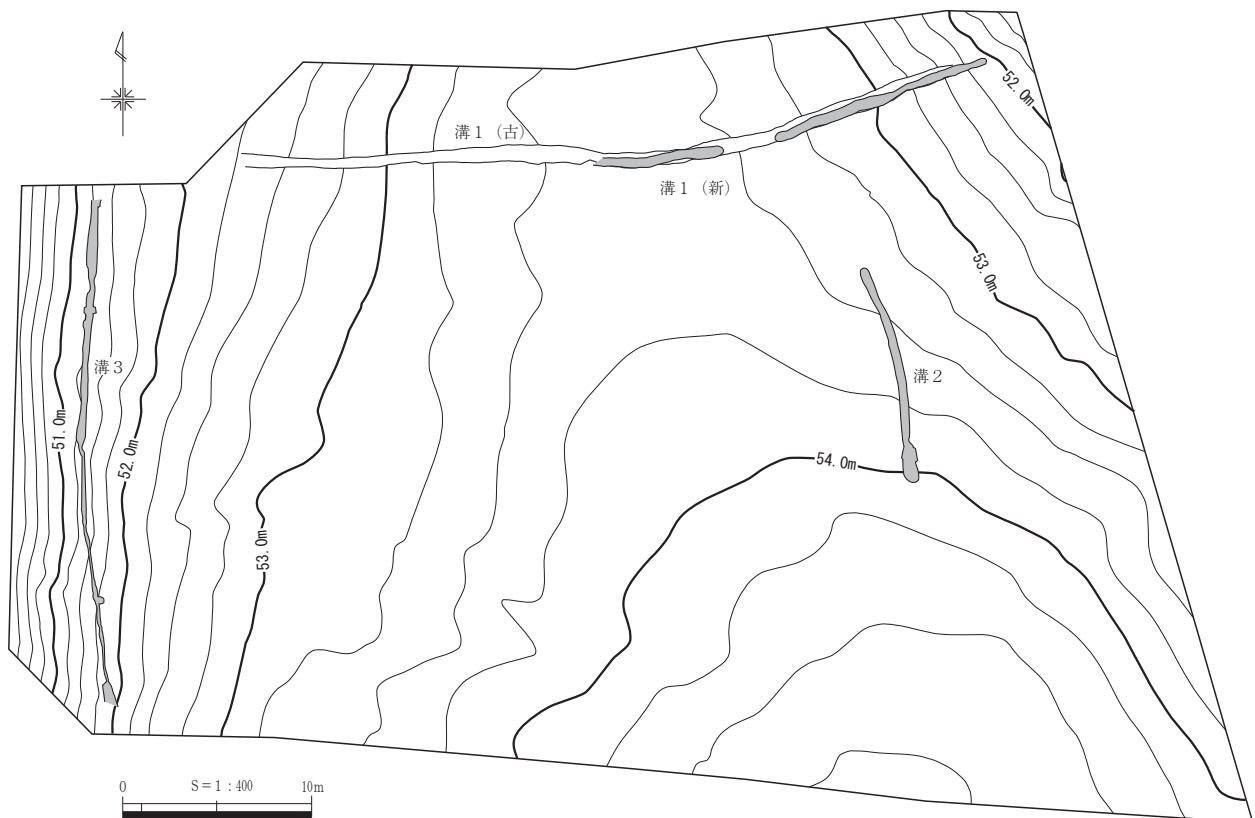
調査地北側に位置する。Ⅱ層上面で検出した。東西方向に走る溝で、埋土の状況から新古2段階に分かれる。以下、新段階を溝1(新)、古段階を溝1(古)として報告する。

溝1(新) (第60図、PL.27)

E2・F1・F2グリッドに位置する。溝1(古)東半部で確認した。中程で2.8mの間隔があり東西2条の溝に細分できる。溝1(古)西半部にあたるC2・D2グリッドでは調査時に認識できずに掘削してしまったが、調査地の西壁でも溝の断面を確認しており、本来は更に西側へ延び、調査地外へと延びていたことが明らかである。西側は検出した範囲で長さ7m、幅0.44～0.62m、深さ0.21m、東側は長さ12m、幅0.27～0.58m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土が堆積しており、断面形は皿状である。遺物が出土しておらず溝(古)との時間差は判然としない。

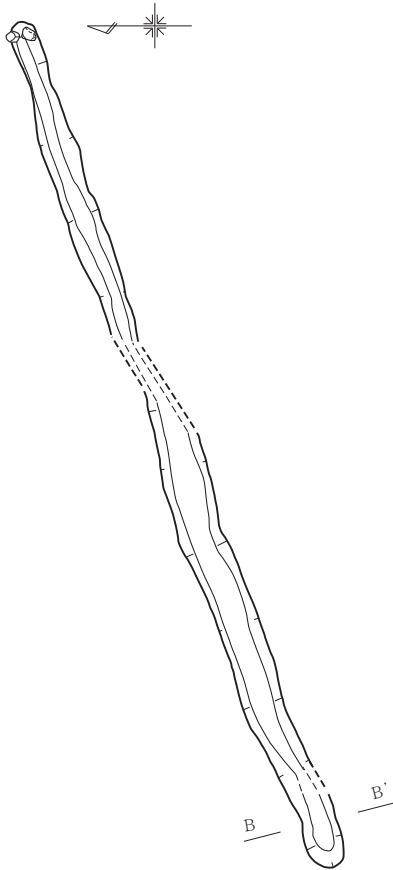
溝1(古) (第61図、PL.27)

C2～F2・F1グリッドに位置する。南から北に延びる丘陵を横切るように延びており、西側は調査地外へと続く。検出した範囲で長さ38m、幅0.4～1.0m、深さ0.22～0.47mを測る。西側(以下、西半部)は東西方向のほぼ直線状で、E2グリッドから東側(以下、東半部)は屈曲しやや北寄りに走行している。東半部の端部は、溝1(新)によって切られ残存しないが、溝1(新)の掘り込みが溝1(古)より深くないため、大きくは失われておらず調査地内で収束していたものと推定する。



※溝1～3は調査前地形測量図と合成

第59図 溝1～3配置図



西半部中程から東半部は溝の底面が断面逆凸字状に掘削されている。埋土は暗褐色系の土が堆積しており、砂層やラミナ状の堆積はみられず、流路として機能していたことは考えられない。

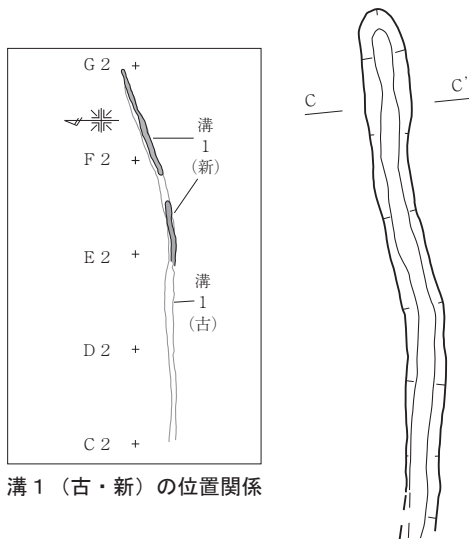
Ⅱ層上面で検出していることから古墳時代前期以降の遺構であるが、遺物が出土しておらず詳細な時期は不明である。

溝2 (第62図、PL.28)

F 3・F 4 グリッドに位置する。南北方向に延びる溝で、Ⅱ層上面で検出した。北側の端部は確認できなかったが、検出した範囲で長さ11.6m、幅0.31～0.8m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色土で、断面は皿状を呈す。遺物は出土しておらず時期は不明である。溝1(新)と埋土が類似しており、溝1(新)に直交する方向であることから、溝1(新)と関連した溝であったと推定する。Ⅱ層上面で検出したことから、古墳時代前期以降の遺構であるが、遺物が出土しておらず詳細な時期は不明である。

溝3 (第63図、PL.28)

B 2～B 5 グリッド、平坦地から遺跡西側の宮川へ向かって下る斜面部へ傾斜変換する付近に位置する。南北方向に延びる溝で、ほぼ等高線に沿っている。Ⅱ層上面で検出した。南北両側とも調査地外へと延びており、検出した範囲で長さ27m、幅0.19～0.55m、深さ0.22～0.4mを測る。調査地南壁付近を除く遺構の大部分をⅡ層除去後に認識したため、本来は幅、深さ共に更に大きかったであろう。埋土は黒褐色土である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。埋土が溝1(新)と類似しており、溝1(新)に直交する方向であることから、溝1(新)と関連した溝であったと推定する。

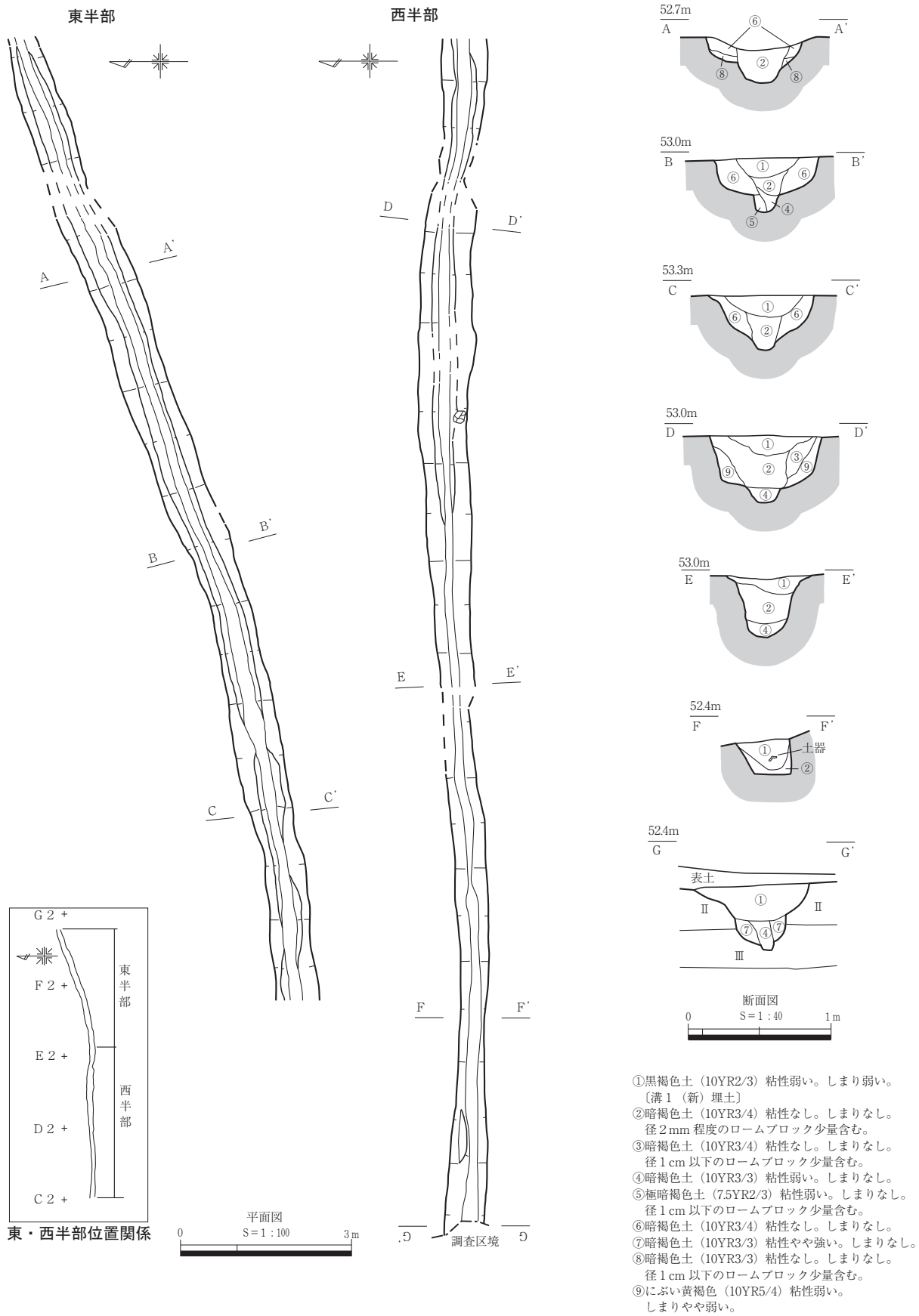


溝1(古・新)の位置関係

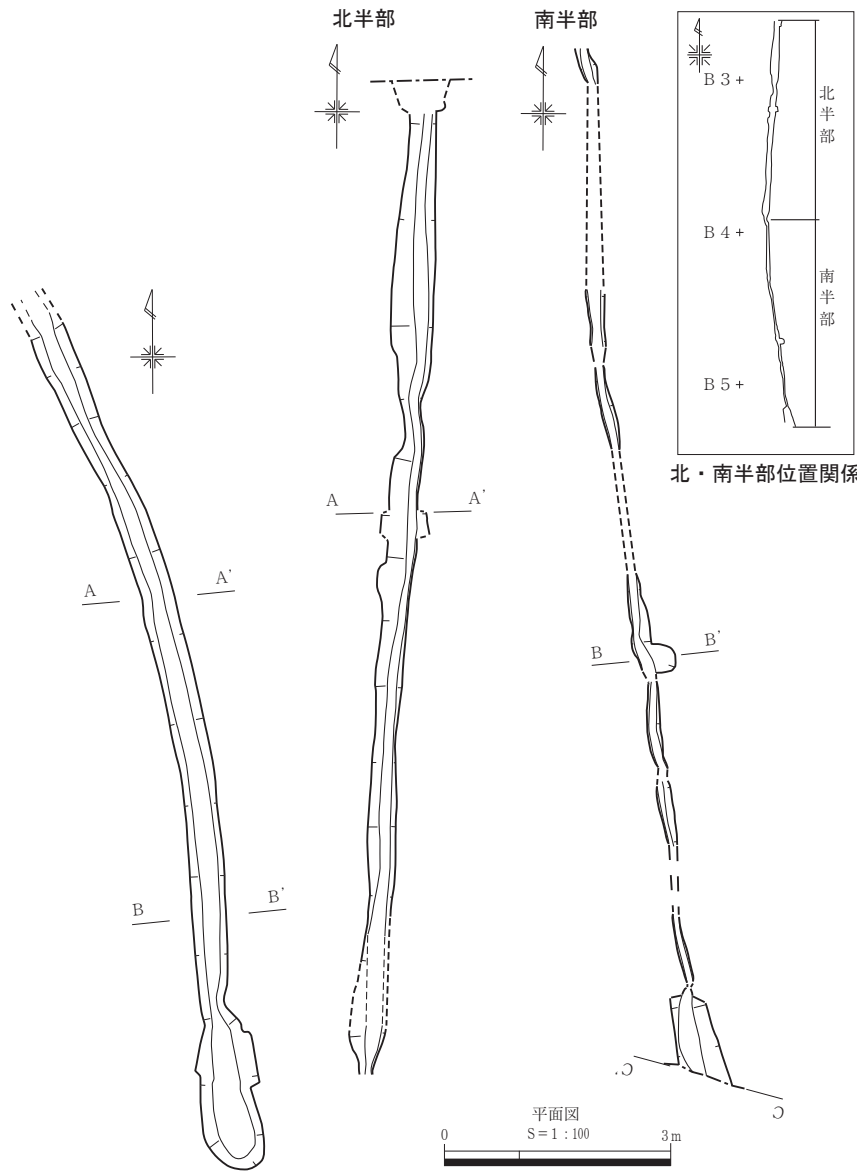
断面図は溝1(古)と共通
0 3m S=1:100

第60図 溝1(新)

溝2・溝3は平坦地から斜面部へ傾斜が変換する付近に位置しており、溝1と併せて平坦地を囲むように位置していることから、これらの溝は土地を区画するなどの何らかの境界を示していたと考える。

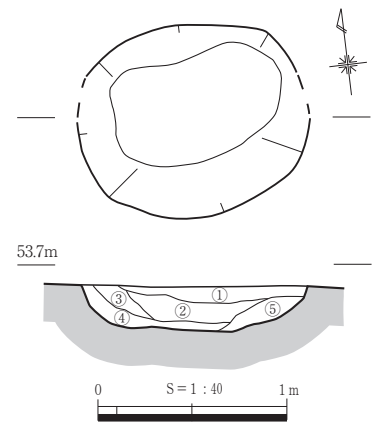


第61図 溝1 (古)



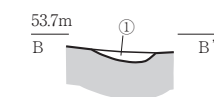
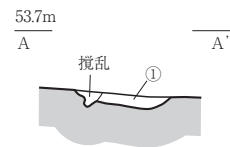
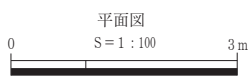
土坑7 (第64図)

E3グリッドの中央、標高53.6mの緩斜面に位置する。I層を除去後、II層の上面で円形の黒色土を検出した。平面は円形で、径1.38~1.19m、検出面からの深さは0.39mを測る。断面形は皿状で埋土は5層に分けられ、黒色土を主体とする。遺物は出土していないが、埋土中から炭化物が出土した。時期・性格ともに不明である。

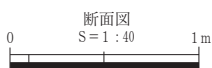


- ①黒色土 (N15/) 粘性なし。しまり悪い。径1~5cm大の炭化物を多く含む。
- ②黒色土 (10YR2/1) 粘性なし。しまり悪い。径1~5cm大の炭化物を多く含む。
- ③暗褐色土 (10YR2/3) 粘性なし。しまり悪い。径2~3cm大の炭化物を含む。
- ④黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし。しまり悪い。径1~3cm大の炭化物を含む。
- ⑤黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし。しまり悪い。

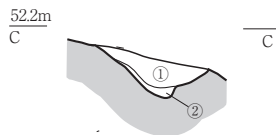
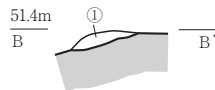
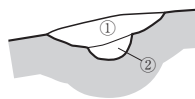
第64図 土坑7



①黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし。しまりやや弱い。



第62図 溝2



①黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱い。しまりなし。
②黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱い。しまりなし。



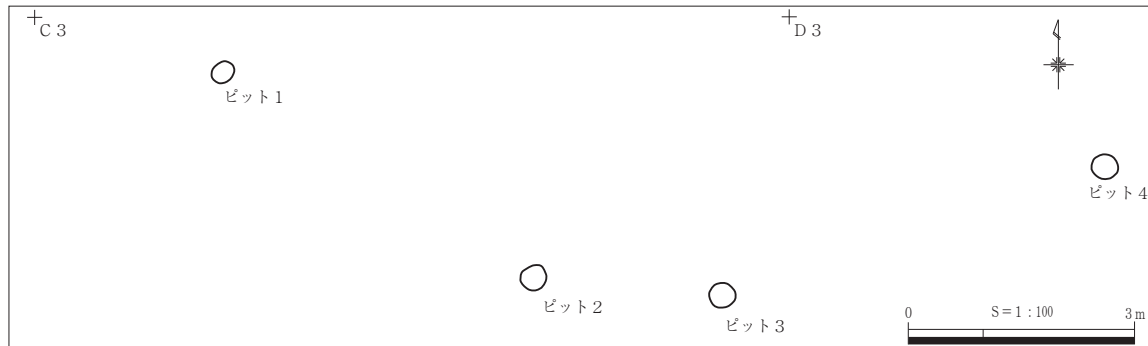
第63図 溝3

ピット 1～4 (第65・66図、表10)

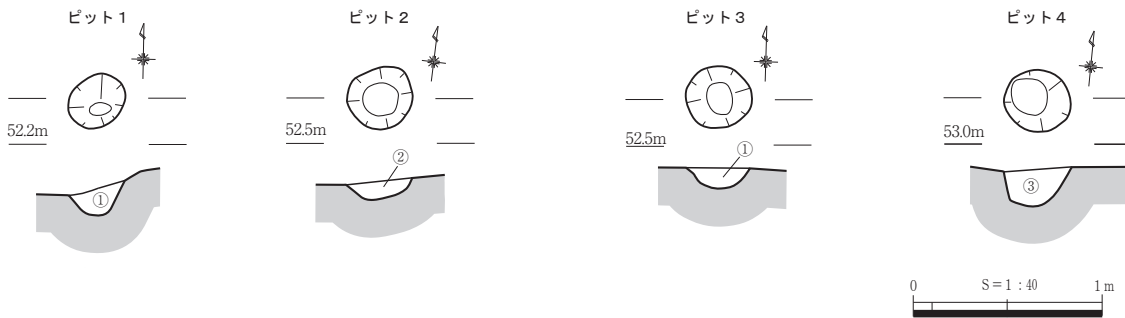
C 3グリッドからD 3グリッドにかけて、Ⅲ層除去後、地山(Ⅳ層)上面で4基のピットを検出した。標高51.9～52.8mの緩斜面に位置する。径は26～36cm、検出面からの深さは11～22cmを測る。埋土はいずれも単層で、いずれもⅡ層由来の明褐色土が入ることから、Ⅱ層堆積開始後に掘り込まれたものと考えられる。柱痕は確認できない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

表10 ピット一覧

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)
ピット1	C 3	26～33	18
ピット2	C 3	32～36	13
ピット3	C 3	32～35	11
ピット4	D 3	32～35	22



第65図 ピット 1～4 配置



- ①暗褐色土 (10YR3/4) しまりなし。粘性強い。径1mm以下のロームブロックをやや多く含む。
- ②暗褐色土 (10YR3/4) と黒褐色土 (10YR2/3) が混じる。しまり弱い。粘性強い。
径1mm以下のロームブロックを少量含む。
- ③暗褐色土 (10YR3/4) しまりなし。粘性やや弱い。径1mm以下のロームブロックを少量含む。

第66図 ピット 1～4 平面・断面

第4章 下市前築地遺跡の調査

表11 出土土器観察表(1)

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	552	土坑3 埋土上層	44 30	縄文土器	器高：△3.2	外面：縄文(LR)、ナデ 内面：ナデ	密(1~2mmの 石を僅かに含 む)	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
2	454	土坑3 埋土上層	44 30	縄文土器	器高：△7.2	外面：羽状縄文(上LR・下RL) 内面：ナデ、指オサエ	密(0.1mm程の 石英・砂粒を 少量含む)	良好	外面：黒色~明黄色 内面：にぶい黄褐色	外面に煤付着
3	25	B3-SE II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△5.0	外面：山形文：上2段、下2段 内面：ナデ	やや粗い(2mm 以下の長石・ 石英を少量含 む)	やや 良	外面：浅黄色 内面：黄褐色	
4	344	D3-SW I層	48 29	縄文土器	器高：△4.5	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸5 ~6mm、短軸2mm)	やや粗い(3mm 以下の長石・ 石英を含む)	良	内外面：黄褐色	内面 磨滅
5	363	C5-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△3.9	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸5 ~6mm、短軸2~3mm) 内面：ナデ	やや粗い(2mm 以下の長石・ 石英を多く含 む)	良	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
6	99	C4-SW I層	48 29	縄文土器	器高：△4.5	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸 7mm、短軸3~4mm) 内面：ナデ	密(3mm以下の 長石、石英を 多く含む)	良	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	
7	119	C4-SE II層	48 29	縄文土器	器高：△5.5	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸7 mm、短軸4~5mm) 内面：ナデ	密(5mm以下の 長石・石英を 多く含む)	良	外面：明褐色 内面：にぶい黄褐色	
8	100	C5-NE I層	48 29	縄文土器	器高：△5.1	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸6 7mm、短軸4~5mm) 内面：ナデ	密(4mm以下の 長石、石英を 含む)	良	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	
9	32	C4-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△4.9	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸7 mm、短軸5mm) 内面：ナデ	密(5mm以下の 長石・石英を 多く含む)	良	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	
10	32	C4-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△6.0	外面：ボジティブ栴円押型文(原体：長軸7 mm、短軸5mm) 内面：ナデ	密(3mm以下の 石英、長石を 多く含む)	良	内外面：灰黄褐色	粘土つなぎが認め られる
11	110	C2-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△6.2	内面：斜行沈線	密(2mm以下の 長石・石英を 多く含む)	良	内外面：にぶい黄 褐色	外面風化
12	36	B4-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△4.7	外面：平行隆帯のち爪型文、押圧による垂 下隆帯のち爪型文 内面：ナデ	密(3mm以下の 長石・石英を 含む)	良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
13	192	E4-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△1.9	外面：横位の刺突文のちナデ 内面：横位1条の沈線のちナデ	密(1mm以下の 長石・石英を 僅かに含む、 雲母を含む)	良	内外面：にぶい黄 褐色	口縁部外面に粘土 つなぎが認められ る
14	168	E5-NE II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△2.4	外面：ナデのち横位の刺突文 内面：貝殻条痕のち口縁部ナデ	密(1mm以下の 長石を僅かに 含む、雲母を 含む)	良	内外面：黄褐色	
15	247	F5-SW II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△2.3	外面：ナデのち横位1条の刺突文、横位の 沈線 内面：貝殻条痕のち口縁部ナデ	密(1mm以下の 長石を僅かに 含む、雲母を 含む)	良	内外面：黄褐色	口縁部外面に粘土 つなぎが認められ る
16	81	E4-SE I層	48 29	縄文土器	器高：△2.3	外面：ナデのち横位2条の押し引き沈線 内面：貝殻条痕のち口縁部ナデ	良	良	内外面：黄褐色	口縁部外面に粘土 つなぎが認められ る
17	192	E4-SW II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△2.6	外面：ナデのち横位2条の押し引き沈線 内面：ナデ	密(雲母を含 む)	良	内外面：黄灰色	口縁部外面に粘土 つなぎが認められ る
18	201	E2-NE I層	48 29	縄文土器	器高：△2.3	外面：貝殻条痕のち横位の押し引き沈線 内面：貝殻条痕	密(0.5mm程の 長石を僅かに 含む)	良	外面：灰褐色 内面：明赤褐色	外面に煤付着
19	181	E5-NW II層	48 29	縄文土器	器高：△4.8	外面：ナデのち半截竹管による幾何学の爪 型文 内面：ナデ	密(1mm以下の 長石を僅かに 含む、雲母を 含む)	良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色 ~灰黄褐色	
20	203	E3-NW II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△4.0	外面：貝殻条痕のちナデ、のち貝殻腹縁に よる横位の爪形文 内面：貝殻条痕 口縁部：刻み目	密(1mm以下の 長石を僅かに 含む、雲母を 含む)	良	内外面：黄褐色	外面に煤付着
21	247	F5-NW II層	48 29	縄文土器 深鉢	器高：△4.1	外面：貝殻条痕のちナデ、のち貝殻腹縁に よる横位の爪形文 内面：貝殻条痕	密(1mm以下の 長石・石英を 僅かに含む、 雲母を含む)	良	外面：にぶい赤褐色 内面：明黄褐色	
22	36	B4-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△3.4	外面：貝殻条痕のち、貝殻腹縁による横位 の爪形文 内面：ナデ	密(2mm以下の 長石、石英を 含む)	良	内外面：にぶい黄橙 色	外面に煤付着
23	168	E5-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△3.3	外面：ナデのち半截竹管による横位の爪形 文 内面：ナデ	密(1mm以下の 石英、長石を 多く含む)	良	内外面：灰黄褐色	
24	91	C3-SW II層	48 29	縄文土器 鉢	器高：△3.6	内外面：条痕(植物)	密	良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色	内外面に煤付着 粘土つなぎが認め られる
25	102	D4-NW I層	48 29	縄文土器	器高：△4.4	内外面：貝殻条痕 口縁部：刻み目	密(6mm以下の 石英を多く含 む)	良	内外面：にぶい褐色	
26	274	D4-NS II層	48 29	縄文土器	器高：△3.5	内外面：貝殻条痕 口縁部：刻み目	密(4mm以下の 石英を含む)	良	外面：にぶい褐色 内面：灰黄褐色	
27	246	F4-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△5.5	内外面：貝殻条痕	やや粗い(3mm 以下の石英を 含む)	良	外面：明赤褐色 内面：にぶい黄褐色	
28	357	E4-NW II層	48 29	縄文土器	器高：△5.0	内外面：貝殻条痕	密(5mm以下の 石英を多く含 む)	良	外面：明赤褐色 内面：灰黄褐色	
29	162	E4-SE I層	48 29	縄文土器	器高：△5.7	内外面：貝殻条痕	密(1mm以下の 長石・石英を 少量含む、雲 母を含む)	良	内外面：にぶい黄橙 色	外面の一部に煤付 着

表12 出土土器観察表(2)

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
30	244	F5-SW II層	48 29	縄文土器	器高：△4.2	内外面：貝殻条痕	密(1mm以下の長石、石英を含む)	良	外面：にぶい褐色 内面：黄褐色	外面に煤付着
31	193	E4-SE II層	48 29	縄文土器	器高：△6.9	外面：ナデのちに横位の沈線、羽状縄文(上RL・下LR)上から下へ施文 内面：ナデ	密(1mm以下の長石、石英を僅かに含む、雲母を含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
32	213	E4-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△4.5	外面：羽状縄文(上LR・下RL)上から下へ施文 内面：ナデ	密(1mm以下の長石、石英を少量含む)	良	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	粘土つなぎが認められる
33	305	F4-NW I層	48 29	縄文土器	器高：△3.9	外面：羽状縄文(上RL・下LR) 内面：ナデ	密(長石、石英を含む、雲母を含む)	良	内外面：にぶい赤褐色	
34	282	F4-NW I層	48 29	縄文土器	器高：△4.4	外面：羽状縄文(上LR・下RL) 内面：ナデ	やや粗い(雲母を含む)	良	外面：褐色 内面：明褐色	
35	260	E3-SW I層	48 29	縄文土器	器高：△5.5	外面：羽状縄文(上RL・下LR) 内面：ナデ	密(雲母を含む)	良	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄色	
36	324	F3-NW II層	48 29	縄文土器	器高：△3.0	外面：羽状縄文(上RL・下LR) 内面：ナデ	密(1mm以下の長石、石英を僅かに含む、雲母を含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
37	344	D3-SW I層	48 29	縄文土器	器高：△2.1	外面：縄文(LR) 内面：貝殻条痕	密	良	外面：暗赤褐色 内面：暗灰黄色	
38	331	E3-SE II層	48 29	縄文土器	器高：△4.3	外面：縄文(LR) 内面：ナデ	密(2mm以下の石英を僅かに含む、雲母を含む)	良	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
39	155	E5-NE I層	48 29	縄文土器	器高：△9.0	外面：口縁部：突帯のちにナデ、半截竹管による横位の爪型文 体部：ナデのち沈線文 内面：口縁部：条痕のちにナデ、体部：条痕	密(4mm以下の長石、石英を少量含む)	良	外面：橙色～褐色 内面：橙色～褐灰色	粘土つなぎが認められる
40	430	C2 II層	48 29	縄文土器 口縁	器高：△1.7	内外面：ナデ	密	良	内外面：黒褐色	粘土つなぎが認められる
41	213	E4-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△2.7	外面：ナデのちに2条の横位の沈線 内面：ナデ 口縁部：刻み	密(1mm以下の長石を僅かに含む)	良	外面：灰黄褐色 内面：暗灰黄色	
42	210	E3-SE I層	48 29	縄文土器	器高：△4.0	内面：ナデ	密(2mm以下の長石、石英を多く含む)	良	内外面：明褐色	外面風化
43	241	F5-NE I層	48 29	縄文土器	器高：△5.0	外面：ナデのち貝殻条痕 内面：ナデ	密(2mm以下の石英を多く含む、雲母を含む)	良	外面：にぶい黄褐色 内面：褐灰色	
44	330	G3-SW I層	48 29	縄文土器	器高：△6.2	外面：貝殻条痕 内面：ナデ	密(2mm以下の石英を含む、雲母を含む)	良	内外面：浅黄色	
45	168	E5-NE II層	48 29	縄文土器	器高：△4.8	外面：ナデのち縄文原体押しつけ 内面：ナデ	密	良	内外面：明赤褐色	
46	68 76 368 477	竪穴住居跡1 埋土上層	53 33	土師器 甕	口縁：※23.6 器高：△10.1	外面：口縁部、頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密(砂粒・石英を含む)	良	内外面：明黄褐色	外面口縁部に煤付着
47	468	竪穴住居跡1 埋土上層	53 33	土師器 甕	口径：※14.6 器高：△6.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密(1～2mm程の石英を多く含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
48	382	竪穴住居跡1 埋土上層	53 33	土師器 甕	口径：※16.4 器高：△4.8	内外面：ヨコナデ	密(1mm程の石英を僅かに含む)	良	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	
49	446	竪穴住居跡1 床面上	53 33	土師器 甕	口径：※17.9 器高：△5.1	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	密	良	外面：にぶい黄褐色～褐色 内面：にぶい黄褐色	外面に煤付着
50	464	竪穴住居跡1 埋土下層	53 33	土師器 甕	口径：※16.6 器高：△6.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦ハケメ後横ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	密	良	内外面：にぶい黄褐色	外面に煤付着 外面風化
51	411 419 514 515 516 526 528 532	竪穴住居跡1 床面上	53 32	土師器 甕	口縁：※15.8 器高：△7.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦ハケメ後波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	密	良	内外面：にぶい黄褐色	
52	411 419 432 513 514 515 516 517	竪穴住居跡1 床面上	53 32	土師器 甕	口径：※16.0 器高：△15.5 最大胴径：※20.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦後横ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	密	良	内面：浅黄色～にぶい黄褐色 外面：にぶい黄褐色	外面体部に煤付着 甕形土器の上面に重なって出土
53	407 432 501 502	竪穴住居跡1 床面上	53 32	土師器 高坏	口径：※24.7 器高：△7.0	外面：縦及び横方向の密なミガキ 内面：底面放射状、体部横方向のハケメ後、縦及び横方向、口縁部横方向のミガキ	密(0.1～0.5mm程の長石、石英を含む)	良	内面：橙色～にぶい褐色 外面：橙色	外面にわずかに煤付着
54	532	竪穴住居跡1 埋土下層	53 33	土師器 高坏	口径：※18.6 器高：△4.3	外面：ミガキ 内面：口縁部ミガキ、底部ハケメ	密	良	外面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色	全体的に風化
55	550	竪穴住居跡1 貼床内	53 33	土師器 器台	器高：△2.3	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ後ミガキ	密(0.5mm程の長石を僅かに含む)	良	内外面：にぶい黄褐色	
56	385	竪穴住居跡1 埋土上層	53 33	土師器 器台	器高：△3.8	内外面：ヨコナデ	密(0.01～0.1mmの石英、砂粒を多く含む)	良	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	
57	65 80 86 98 378 379 396 398 428 437 438 458 483 484 486 488 491 495 507 506 508 509 511 512 518 519	竪穴住居跡1 床面上	53 32	土師器 甕形土器	広口径：39.8 器高：77.1 狭口径：11.1	外面：体部縦方向主体のハケメ、口縁部および底部ヨコナデ、把手(上)部ナデ、把手(下)部斜め方向のハケメ後横方向のハケメ 内面：体部横方向主体のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、底部ヨコナデ、指オサエ	密(1mm程の石英を僅かに含む)	良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	内面に煤わずかに付着

第4章 下市前築地遺跡の調査

表13 出土土器観察表(3)

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
58	114 339	D4-SE I層 C4-SE II層	54 33	土師器 甕	口径：※16.9 器高：△4.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 口縁端部：オサエ	密	良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄褐色	外面に煤付着
59	45	B4-NE I層	54 33	土師器 甕	口径：※15.4 器高：△5.5	外面：ハケメのちヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ケズリ	密	良好	内外面：淡黄色	
60	55	C4-NW I層	54 33	土師器 甕	器高：△4.0	内外面：ヨコナデ	密(0.5mm程の 石英を僅かに含 む)	良好	内外面：明黄褐色	
61	339	D4-SE C4-SE I層	54 33	土師器 甕	器高：△11.1 最大胴径： ※18.0	外面：ハケメのち肩に波状文 内面：上部ケズリのちヨコナデ、下部ヨコ ナデ	密(1mm程の石 英を僅かに含 む)	良好	内外面：にぶい黄橙 色	
62	60	C4-NE I層	54 33	土師器 器台	器高：△5.2 底径：※18.4	外面：ヨコナデのち波状文 内面：上部ヘラケズリ、下部ヨコナデ	密(1mm程の石 英を僅かに含 む)	良好	内外面：にぶい黄橙 色	
63	178	E1-SE I層	54 33	土師器 器台	器高：△5.3 台径：※23.8	外面：ヨコナデ 内面：上部ケズリのちナデ、下部ヨコナデ	密	良好	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
64	271	G4-NW I層	55 33	須恵器 環	口径：※15.4 器高：△3.3	内外面：回転ナデ	密(2mm程の砂 粒を少量含む)	良	内外面：浅黄色	
65	270	G4-NW I層	55 33	須恵器 環	口径：※16.8 器高：△4.5	外面：回転ナデ後体部中位に断面三角形の 突帯を貼り付ける 内面：回転ナデ	やや粗い(0.5 ~2mm程の長 石、石英を多 く含む)	不良	内外面：淡黄色	
66	301	G3-SE I層	55 33	須恵器 高台環	器高：△0.8 底径：※8.8	外面：底面回転糸切後、断面三角形の高 台を貼り付ける 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰オリーブ 色	
67	286	H5-NW I層	55 33	須恵器 壺	器高：△7.9 最大胴径： ※16.1	内外面：回転ナデ	密(0.5~2mm 程の長石、石 英を含む)	良好	内外面：灰色	
68	290	G4-N4 I層	55 33	土師器 環	器高：△2.2 底径：※5.8	外面：回転ナデ後底面回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：明黄褐色	外面赤彩か
69	315	G3-NW I層	55 33	土師器 環	器高：△2.3 底径：※4.8	外面：回転ナデ後底面回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：にぶい黄橙 色	外面赤彩か
70	161	E3-NW I層	55 33	土師器 甕	口径：※17.2 器高：△3.0	内外面：ヨコナデ	密	良	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面一部赤彩及び 煤付着
71	96	G4-NE I層	55 33	土師器 甕	器高：△2.3	外面：頸部縦ハケメ後口縁部ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面：にぶい赤褐 色	
72	301	G3-SE I層	55 33	土師器 甕	器高：△8.5	外面：頸部付近連続する指ナデ。 内面：斜め方向のケズリ後ナデ。	やや粗い	良好	外面：灰褐色 内面：にぶい橙色	

表14 出土石器観察表

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
S1	454	土坑3 埋土上層	44 30	楔形石器	黒曜石	3.3	1.7	1.0	3.5
S2	461	土坑3 埋土上層	44 30	磨石	安山岩	9.0	7.6	5.8	513.0
S3	1	D4 I層	49 30	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.4	0.68
S4	37	C4-SW II層	49 30	石鏃	サヌカイト	△1.9	1.7	0.2	0.8
S5	56	E4-NW I層	49 30	ノッチドスク レイバー	黒曜石	2.3	2.6	0.7	2.0
S6	140	D2-SE I層	49 30	石核	黒曜石	4.4	6.2	2.1	56.5
S7	223	E3-SW II層	50 30-31	磨石	安山岩	10.0	8.0	5.8	708.5
S8	462	E2-NW II層	50 30-31	磨石	安山岩	10.2	9.2	5.0	599.5
S9	206	E3-NE II層	50 30-31	磨石	安山岩	10.1	10.0	6.3	809.5
S10	227	D3-SE I層	50 30-31	磨石	安山岩	12.4	10.7	5.9	1,145.0
S11	209	E3-SW I層	50 30-31	磨石	安山岩	8.8	7.9	5.1	544.0
S12	206	E3-NE II層	50 30-31	磨石	安山岩	7.4	7.4	4.7	343.0
S13	159	E5-NE I層	50 30-31	敲石	安山岩	10.3	4.3	3.7	226.0
S14	115	D2-NW I層	50 30-31	磨石	安山岩	17.2	9.2	4.1	1000
S15	204	E4-NW I層	50 30-31	石皿	角閃石安山岩	△20.8	△33.8	9.7	3435

表15 出土鉄器・銭貨観察表

遺物番号	取上番号	遺構名 層位名	挿図 PL	器種	法量 (cm)	形態・手法上の特徴	備考
F1	535	竪穴住居跡1 埋土	53 31	鉈	最大長：△6.0 最大幅：6.0 最大厚：0.15	先端部わずかに欠損。基部は錆化により欠損。	重量：7.712 g
B1	41	C4-NW I層	56 -	銭貨	最大長：2.5 最大幅：2.55 最大厚：0.15	一部欠損。「嘉祐元寶」	重量：△2,382 g

第7節 自然科学分析

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

鳥取県西伯郡大山町下市に位置する下市前築地遺跡の縄文時代の落とし穴より検出された炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表16のとおりである。

試料は、縄文時代の落とし穴である土坑3の最下層の土壌から水洗選別により得られた炭化材1点(試料No.1:PLD-17616)である。土坑3の上層からは縄文時代前期中葉～後葉を主体とする複数の時期の遺物が出土しているが、今回の年代測定試料である試料No.1は最下層から採取された炭化材であり、土坑3が廃絶された時期に近い試料と判断されている。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表16 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17616	試料 No.1 位置: E3 グリッド 遺構: 土坑3 層位: 最下層 (①層) 深度: 検出面から 90 ~ 110cm	試料の種類: 炭化材 (散孔材) 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)

3. 結果

表17に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第67図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40

年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

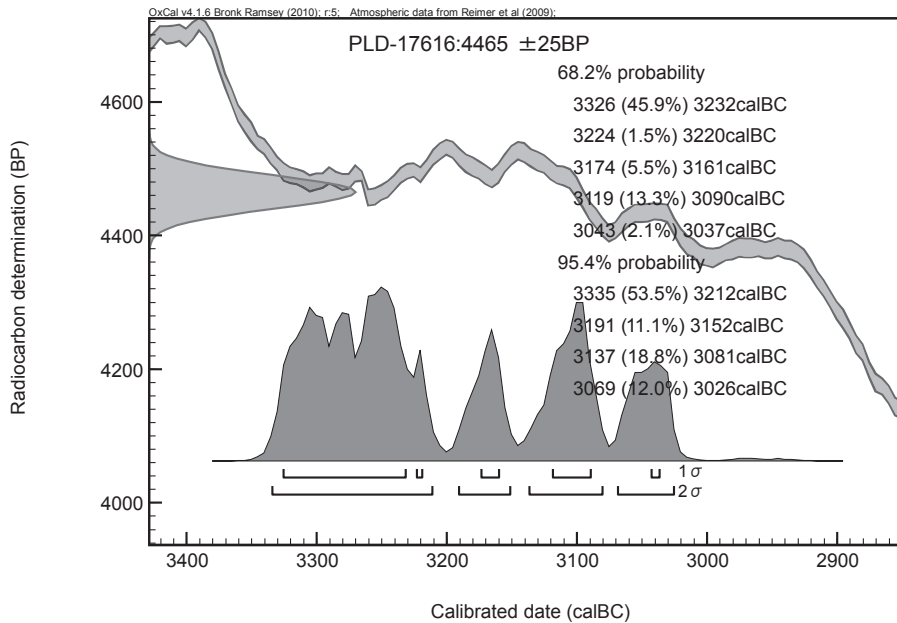
¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ：INTCAL09)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表17 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-17616 試料No.1	-24.82 ± 0.12	4465 ± 25	4465 ± 25	3326BC (45.9%) 3232BC 3224BC (1.5%) 3220BC 3174BC (5.5%) 3161BC 3119BC (13.3%) 3090BC 3043BC (2.1%) 3037BC	3335BC (53.5%) 3212BC 3191BC (11.1%) 3152BC 3137BC (18.8%) 3081BC 3069BC (12.0%) 3026BC

4. 考察

各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲(95.4%)に着目すると、縄文時代の落とし穴である土坑3の最下層から出土した炭化材(試料No.1：PLD-17616)は、3335-3212 cal BC (53.5%)、3191-3152 cal BC (11.1%)、3137-3081 cal BC (18.8%)、3069-3026 cal BC (12.0%)の暦年代範囲を示した。



第67図 暦年較正結果

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
 Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第8節 下市前築地遺跡の総括

下市前築地遺跡の調査では、縄文時代と古墳時代前期の遺構・遺物が主な成果であった。以下では、これらの成果について、時期ごとに整理し、総括とする。

縄文時代

落とし穴4基、性格不明の土坑2基を確認し、縄文時代早期中葉から後晩期までの土器、石鏃・磨石などの石器が遺構内外から出土した。

落とし穴は調査地の南北方向の尾根筋に沿うように分布している。それぞれの間隔は9～12mとほぼ一定しており、いずれも底面にピットを伴わない点でも共通しているので、一連で仕掛けられたものと想定している。土坑3から採取した炭化物の放射性炭素年代測定結果(第4章第7節)から、これらの落とし穴は縄文時代中期前半の遺構と考えられる。

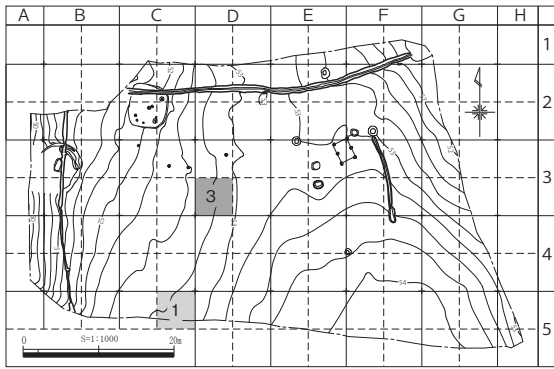
縄文土器はI・II層中から出土したが、層位の上下関係と遺物の新古が一致していない。これは、これらの層が周辺地からの流れ込みによる二次堆積であるためであり、I・II層ともに縄文土器に加え古墳時代の土師器も含んでいる。このため出土した縄文土器は、遺跡地内ではなく、遺跡周辺の様相を示す遺物と考えられる。なお、発掘調査中に縄文土器の出土位置に偏りがあることがわかっており、分布のあり方が、本来土器が位置していた場所と何らかの関係があることを想定していた。そこで縄文土器の時期、出土地点、層位の関係を明らかにするため、時期の判明しているものについて層位ごとに分布を検討した(第68図)。早期、早期末～前期初頭、前期前葉、前期中葉の4つの時期に該当する出土点数を4分割グリッドごとに示している。土器の分布傾向について、以下の4点に整理できる。

- ① I層・II層いずれにおいても、同時期の土器は同様の平面分布の傾向を示す。
- ② 早期の土器はDグリッド列から西側を中心として分布し、Eグリッド列から東側から出土していない。
- ③ 早期末～前期中葉の土器はE4グリッドを中心分布する。調査地西側や東側では総点数に比べて少ない。
- ④ 前期中葉の土器の分布は、E・Fグリッド列に限られている。

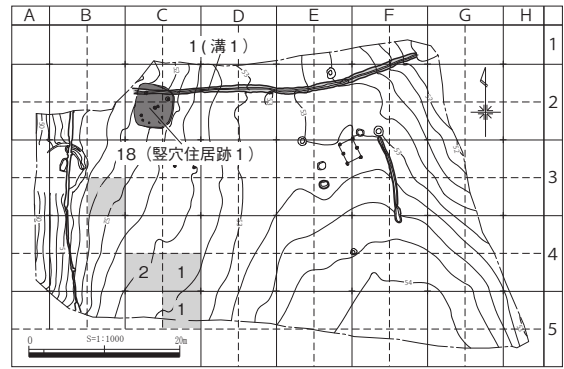
層位による時期の傾向に差はみられず、むしろ層位に関わらず各時期の土器が分布を異にしている状況が読み取れる。すなわち、二次堆積土であるI層、II層いずれが堆積する過程においても、時期ごとに同様の平面的位置関係を保っている。このことは、各時期の土器は由来する地点が異なっており、I・II層それぞれが堆積する期間に、それぞれの地点から同様に土が流れ込んだ結果であろう。調査地内での時期ごとの分布の差は、当時の集落の位置の差など、時期ごとの土器の分布状況の差を示していると考えられる。また、早期末～前期中葉の土器と同様の平面分布で石皿や磨石が出土している。これらの遺物は定住を含め長期的な人間活動を示唆するものであり、南東側の丘陵上に集落域が及んでいた可能性を強くするものである。

周辺地の縄文時代集落の状況の手がかりは限られているが、土器をはじめとした縄文時代の遺物が確認されている。隣接する下市築地ノ峯東通第3遺跡においても、縄文時代各時期の土器が出土しているが、後晩期を中心とした組成であり、早期末から前期初頭を中心とする下市前築地遺跡とは様相を異にする。遺構としては、後晩期に相当する土坑群が確認されている。調査の結果、下市築地ノ峯

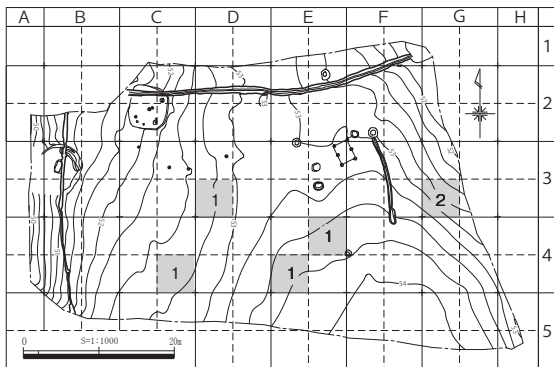
第4章 下市前築地遺跡の調査



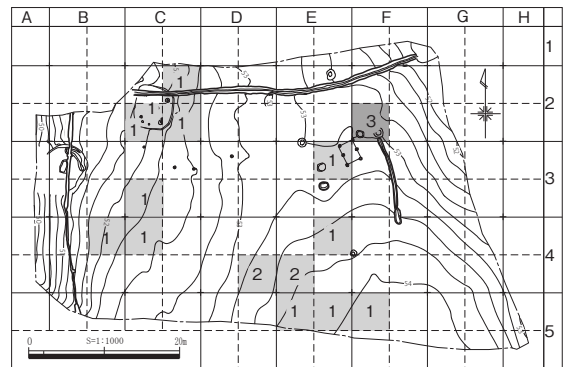
I層 早期



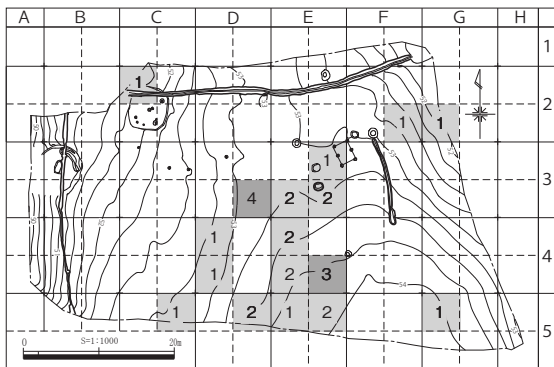
II層 早期



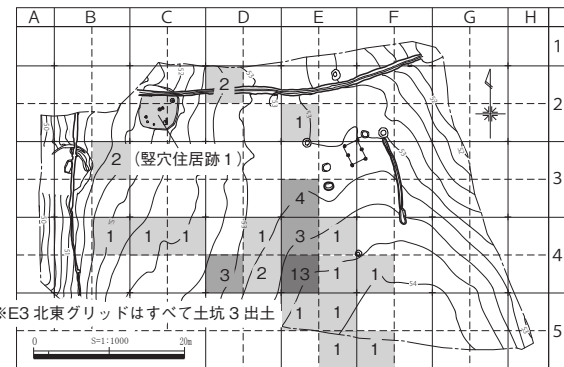
I層 早期末から前期初頭



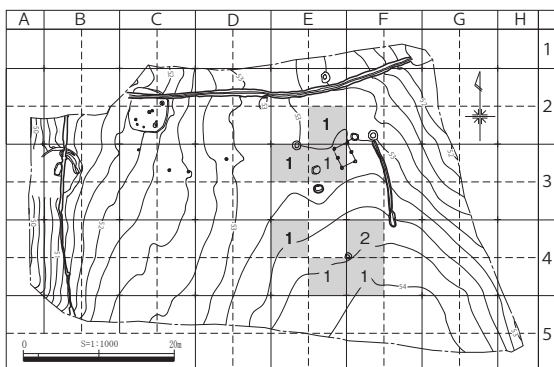
II層 早期末から前期初頭



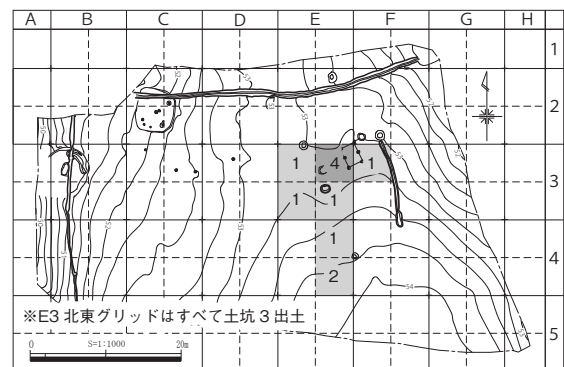
I層 前期前葉



II層 前期前葉



I層 前期中葉



II層 前期中葉

- 1・2点
- 3～5点
- 6点以上

※方眼の数字は出土点数を示す。

第68図 縄文土器分布状況

東通第3遺跡の西側には南北方向の谷が広がっていたことが確認されており、現況の東側の谷と併せて独立した舌状丘陵上に位置していたことが分かる(第2図)。したがって後晩期はこの下市築地ノ峯東通第3遺跡の位置する丘陵上に人間活動の中心があったことが想定できる。さらに、その東隣の丘陵と東側の谷部に位置する下市築地ノ峯東通第2遺跡では早期末～前期を中心とした土器に加え、石器製作に関わる黒曜石片が多量に出土している。

以上のことから当遺跡周辺では、住居跡は確認されていないものの、縄文時代の長期的な人間活動が想定できる遺物や遺構があることから、近隣に集落が広がっていた可能性を指摘できる。また、人間活動の中心となる場所も時期ごとに異なり、それは微地形と大きく関わっていたと考える。

古墳時代

調査地の北西隅で古墳時代前期前半の竪穴住居跡1棟(竪穴住居跡1)を確認した。調査地内には竪穴住居跡1の他に古墳時代前期と判断できる遺構はなく、竪穴住居跡1を含む集落は調査地外の北側に広がっていたと推定する。

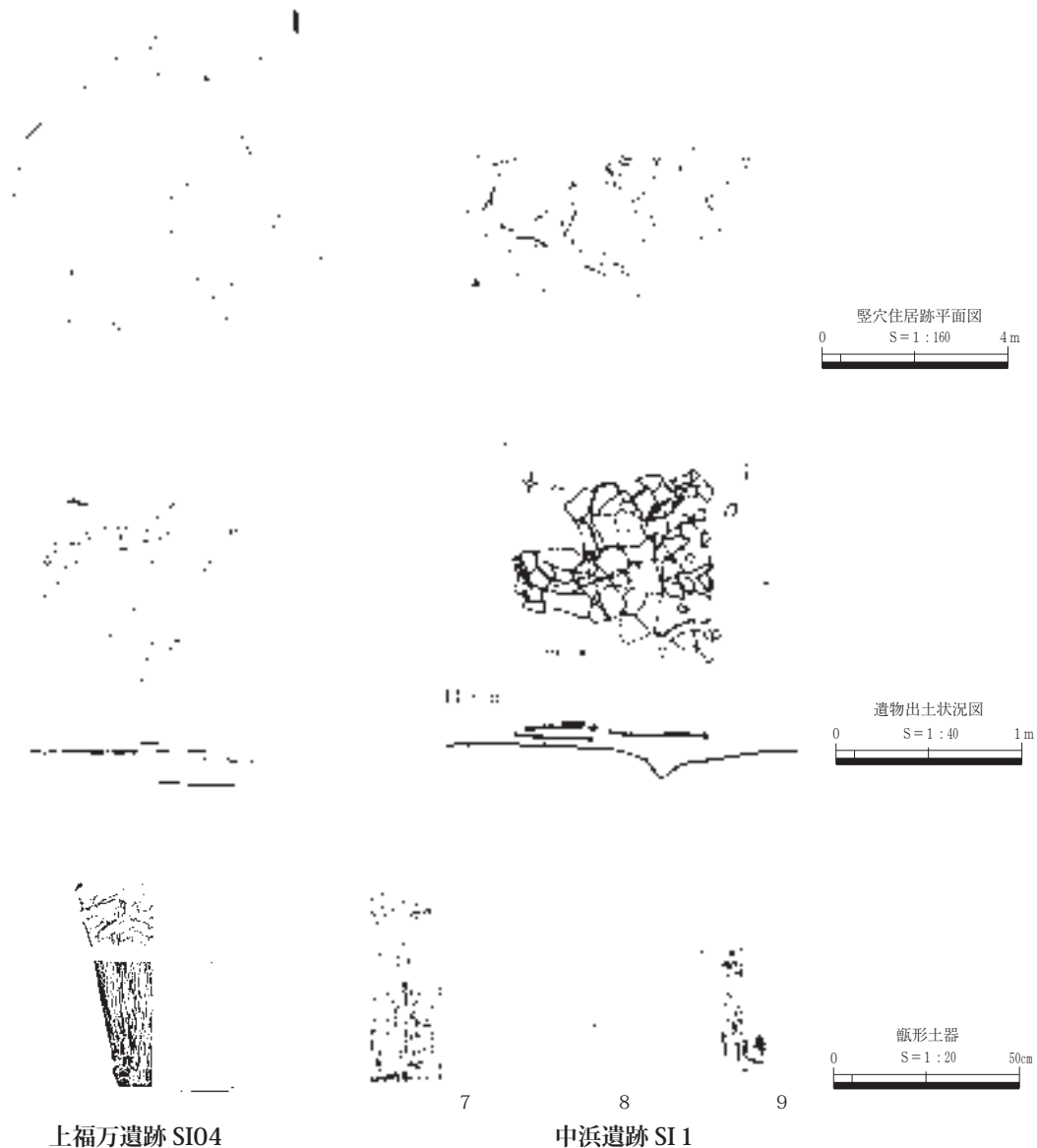
竪穴住居跡1からは床面上を中心に土器・鉄器が出土しており、なかでもほぼ完形に復元できる甑形土器が出土していることは特徴的である。他遺跡で甑形土器の出土状況が明らかな遺構は、古墳時代前期前半としては寺戸第1遺跡(東伯郡湯梨浜町)SI03⁽¹⁾、橋本徳道遺跡(米子市)竪穴1等⁽²⁾があり、いずれも住居の隅で広口部を下にしている。これらは使用というよりも保管状況を示すとみられる。また、古墳時代前期前半の越敷山遺跡群(西伯郡伯耆町)SI14⁽³⁾や代遺跡(西伯郡伯耆町)SI32⁽⁴⁾、弥生後期まで遡るが宇代寺中遺跡(西伯郡伯耆町)SI01⁽⁵⁾のように、中央ピット付近で横倒しのような状態で出土している例もある。

これらの例に対し、本遺跡の甑形土器は破片の多くが内面を上側に向けており、その上に重なって底部を欠いた甕が出土している。本遺跡と類似した出土状況を示す例としては、上福万遺跡(米子市)SI04⁽⁶⁾、中浜遺跡(東伯郡北栄町)SI1⁽⁷⁾がある(第69図)。上福万遺跡SI04では、住居の壁際の柱付近の床面上から1個体の甑形土器が概ね内面を上側に向けた状態で出土している。時期も古墳時代前期初頭で、本遺跡と同時期であり、甑形土器の形状も類似する。時期はやや下る中浜遺跡SI1では、古墳時代前期後半に廃絶した竪穴住居跡で、完形に復元できる甑形土器が3点出土している。このうち2点が、住居跡中央付近で1箇所にとまって出土しており、うち1点は内面を上側に向け、甑形土器が人為的に敷き並べられていた状況であった。報告では「住居廃棄に伴う儀礼的行為」の可能性を指摘している。

これらの例と比較しつつ本遺跡の甑形土器や他の土器の出土状況を整理すると、次の3点を挙げることができる。

- ① 甑形土器は床面直上から内面を上側に向けて出土している。
- ② 下半部を欠いた甕が甑形土器の上に重なっている。
- ③ 甑形土器の南隣には脚部を欠損する高坏が正位置で出土している。

①の内面を上にした出土状況は中浜遺跡と共通した状況であり、②・③も意図的に配置した結果といえるだろう。これらのことから、本遺跡の甑形土器の出土状況は、使用状況や保管状況を示すのではなく、住居廃絶時の特殊な状況を示していると考えられる。中浜遺跡と同様、住居の廃絶に伴う何らかの儀礼的、もしくは祭祀的な意図のうえで配置された可能性も考えられる。



上福万遺跡 SI04

中浜遺跡 SI 1

※報告書挿図の縮尺と配置を一部改変している。

第69図 上福万遺跡SI04・中浜遺跡SI 1 及び出土甑形土器

ただし、具体的な行為の詳細については明確ではなく、住居の廃絶に伴う甑形土器をめぐる何らかの行為を明らかにするには、甑形土器の意図的な配置状況を示す類例が今後さらに増加するのを待たねばならないだろう。

引用・参考文献

1. 財団法人鳥取県教育文化財団 1998『石脇第3遺跡 石脇8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石脇第3遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書54
2. 財団法人鳥取県教育文化財団 2003『橋本遺跡群』鳥取県教育文化財団調査報告書85
3. 会見町教育委員会 岸本町教育委員会 1992『越敷山遺跡群』
4. 溝口町教育委員会 1993『代遺跡』
5. 財団法人鳥取県教育文化財団 1996『鶴田荒神ノ峯遺跡 鶴田堤ヶ谷遺跡 宇代横平遺跡 宇代寺中遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書43
6. 財団法人鳥取県教育文化財団 1985『上福万遺跡、日下遺跡、石州府第1遺跡、石州府古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書17
7. 財団法人鳥取県教育文化財団 2004『中浜遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書92